

④ 福井県嶺南地域における課題解決型事業・プロジェクト

④ 福井県嶺南地域における課題解決型事業・プロジェクトについて

嶺南地域共創センターでは、福井大学の第4期中期計画を推進するため、ステークホルダーと協働し、学内公募により、嶺南地域の課題解決に取り組む事業・プロジェクトに対し支援を行っています。

<対象事業・プロジェクト>

嶺南2市4町（敦賀市、小浜市、美浜町、若狭町、おおい町、高浜町）・福井県等と連携し、嶺南地域の地域課題に取り組む事業・プロジェクト

<令和6年度実施分>

	事業名
1	令和6年度 嶺南地域をフィールドとした学校－地域連携教育プログラム開発合宿研修
2	福井こんぶDayプロジェクト～福井の昆布文化を発信する～
3	令和6年度 理科嶺南地域教材開発・活用プロジェクト
4	令和6年度 嶺南地域教育プログラム交流・研修会
5	教育学部 嶺南地域枠入試合格者のための入学前教育
6	嶺南地区における学校拠点を中心とした教育支援活動
7	嶺南地域の学校における探究学習推進プログラム
8	(仮称) おおい町まちづくりカレッジ準備プロジェクト
9	敦賀市知育・啓発施設ちえなみきにおける「知の共創」プロジェクト
10	美浜町における全天候型あそび場施設の計画に関する研究
11	高齢社会における地域の暮らしの安心を支える小浜市地域公共交通システムの構築
12	敦賀「情報プラットフォーム」づくり
13	嶺南地域・子どもヘルスリテラシー向上プロジェクト
14	小浜市における「食縁」の変容がもたらす地域課題の分析とその解決に向けた提案
15	わかさ健活プロジェクト
16	小浜みらいGO膳プロジェクト
17	福井梅の収量向上のためのドローンを用いた画像・点群処理に基づくIoT技術の導入
18	鉄道と海運の町・敦賀から発信する人権啓発事業

事業名称：令和6年度嶺南地域をフィールドとした学校－地域連携教育プログラム開発合宿研修

代表者名：浅原 雅浩 教員養成領域・教授

事業の目的：R5, 6年度地域連携カリキュラム研究Ⅱの受講者合同による地域の体験活動を主体とした嶺南地域の実地調査研究に基づく小学校－地域連携カリキュラムの開発実習を行う。

活動内容：令和5年4月19日(金)午後～21日(日)の2泊3日の合宿研修を若狭町内で実施した。福井大学をバスにて出発し、以下の内容にて、町内の調査を行い、それに基づく小学校－地域連携カリキュラムを5チームに分かれて開発し、地域のステークホルダーに対してプレゼンテーションするまでの「学校－地域連携教育プログラム開発合宿研修」のプログラム開発を行った。

日時：令和6年4月19日(金)－21日(日) 2泊3日

研修会場：若狭町立梅の里小学校、若狭みかた梅生産組合、
福井県年縞博物館、若狭三方縄文博物館、三方五湖、熊川宿
福井県立三方青年の家(宿泊・演習・発表会場)

参加者：学部3年生10名, 2年生13名, 院生スタッフ2名, 引率教員2名 計27名

日程：

4月19日(金)

12:20 福井大学発
13:55-15:20 梅の里小学校(新田美樹 校長)
交通安全教室視察・学校地域連携に関するインタビュー
15:30-16:45 若狭みかた梅生産組合および町特産振興室 担当者 インタビューと施設見学
17:00 三方青年の家 着
入所式・オリエンテーション
「三方青年の家」の小学生の利用事例について(石倉由起雄 所長)
18:00 夕食
19:00-22:00 グループワーク(途中、順番に入浴)の後、就寝

4月20日(土)

8:50 三方青年の家 発
9:00-10:18 福井県年縞博物館 解説を受けながらの視察と北川学芸員の講義
10:20-11:45 若狭三方縄文博物館 解説を受けながらの視察と火おこし体験
11:50-12:30 三方青年の家にて、昼食
12:45-14:40 門井教員の引率・解説による三方五湖巡検
(菅湖→浦見川(散策)→久々子湖→日向湖)
15:00-16:30 熊川宿 語り部さんの解説を受けながらの視察
17:00 三方青年の家 着
18:00 夕食
19:00-22:00 地域素材を活用した学習プログラム作成①
(途中、進捗チェック。別の団体も宿泊しており20:00-22:00間に入浴)

4月21日(日)

8:30 プログラム作成②
11:30 昼食
12:30-14:00 プレゼンテーション(発表7分・質疑3分)
14:00-14:20 退所式の後、三方青年の家 発
16:00頃 福井大学 着

第1日目(4月19日(金))



第1日目借上げバス



梅の里小学校長インタビュー



若狭みかた梅生産組合インタビュー



三方青年の家所長講義

第2日目(4月20日(土))



福井県年縞博物館 北川研究員の講義



若狭三方縄文博物館で火おこし体験



三方五湖巡検(門井教員の解説)



第2日目借上げバス



熊川宿の視察 語り部さんの解説を受けながら

第3日目(4月21日(日))



プレゼン作成と事前指導



成果発表と質疑応答



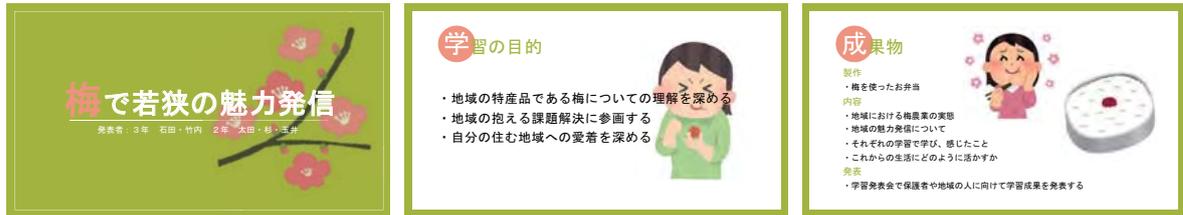
ステークホルダーからのコメント

当日の助言者・協力者：

福井県嶺南教育事務所次長、若狭町長、若狭町教育委員会事務局長、梅の里小学校長、
三方青年の家主事
以上5名

成果：

① 参加学生が5チームに分かれて開発した学習プログラム PPT ファイルの抜粋を示す。



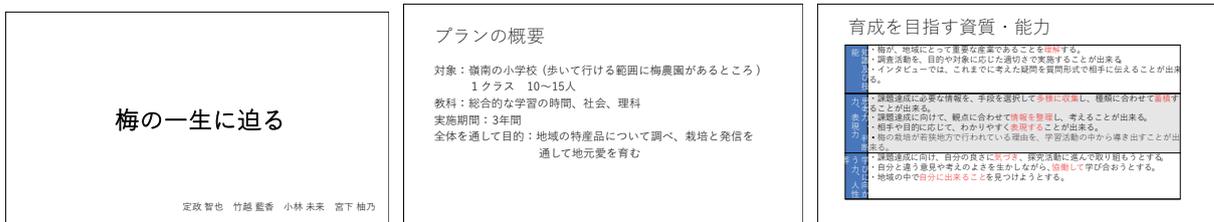
【特徴】梅生産組合の方のインタビューを基に、1年を通して梅に携わることをプログラムの軸としている。1学期は「地域を知る」フェーズ、2学期が「知ったことを基に考えて行動する」フェーズというように目的を分けて計画している。なお、主に子どもたちが主体となって課題や自分たちにできることを考えて実行することを前提としている。外部との連携では高校や梅を販売している施設など、他のチームにはない地域の連携を取り入れてみた。評価規準を具体的に設定したこと。計画が長期であることの難しさはあるが、内容自体は突飛ではないため、若狭町内の学校ならば実践可能であること。



【特徴】校外学習で他県の宿場町を実際に見て、比較することで地元の良さに改めて気づくことができる。児童の興味関心に結びつけた学習ができる。嶺北との関わりや他県の宿場町との繋がりを感ずることができる。ICTや国語、総合的な学習の時間などの教科横断的な学習を行うことができる。協働的な学習を行うことができる。



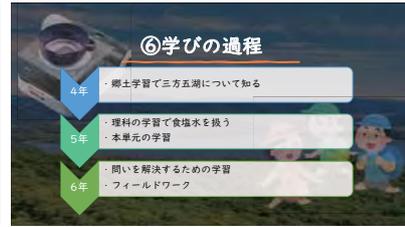
【特徴】このプログラムの作成の工夫としては、熊川宿を観光資源としてみるのではなく、若狭町が推進しているSDGs 11：住み続けられるまちづくりをという観点から考えたことである。語り部さんのお話の中に「観光も大事だが、住み続けながらこの町を守っていきたい」とうものがあった。そこから子どもたちに、熊川宿についてこの「観光」「暮らし」の2つの観点から考えてもらおうとした。



【特徴】3年間の年間指導計画なので、スライドにつながりを持たせることで視覚的にわかりやすくした。色彩配置を梅のような色合いにすることでテーマとスライドの関係を表している。プログラムの内容で4年次に作成したものが6年生で使われたり段々学年が上がるごとにステップアップしていくように年間の計画を立てた。各学年の目標を記載することでその1年間は何をするのかを分かりやすくした。



②育てたい資質能力		
知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
<ul style="list-style-type: none"> 三方五湖は、地域に属している重要な資源であることを理解する。目的に対して適切な方法で調査活動を行うことができる。 三方五湖に関する課題について、探究的に学習することによって実用する、ということに気づく。 	<ul style="list-style-type: none"> 三方五湖と関わることを通して、関心を持ち、疑問を抱く等して、その解決方法等について考えることができる。 課題の解決に必要な情報を収集し、選択することができる。 設定したテーマの解決に向けて、目的に合わせた情報を整理しながら考えることができる。 調べたことや体験をしたことを、目的に応じて表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題解決に向けて、自分の強みに気づき、それを活かして積極的に協働探究に取り組みることができる。 三方五湖に関心をもち、自分の地域の資源のことにより知らうと、地域の人や施設に積極的に関わろうとすることができる。



【特徴】工夫点は主に3つある。1つ目は4～6年の継続学習であること、2つ目は理科・社会・総合的な学習の時間の3つの授業を関連させていること、3つ目は5年生の学習終了後に自分でさらに課題や疑問を見出し、6年生で探究するといった探究学習であることである。

② 学生アンケートより

○ プログラムの省察（抜粋）

地域の特徴を生かしたプログラムを作成する初めての機会だったが、学習の進度や予算などを考慮しなければならなかったため、かなり難しく感じた。私は若狭町の出身でこの研修で訪問した施設にも何度か訪れたことがあったが、今回の研修を通してさらに知識を深めることができたと感じている。3年生ともグループで協力してプログラムを作成したことで、3系としての仲も深まった良い研修になったと感じている（初等2年）。

今回の合宿研修で教師としての目線はもちろんだが、生徒としての目線でどのように授業を進めていけばよいか考える機会になった。合宿の内容を改めて見ると、小学校の合宿プランでも活かせるような計画となっていた。若狭町の観光地や博物館などを巡り、そこで学んだことをメモして振り返るこの一連の流れは、内容は違えどまさに小学校の体験学習のようだった。この合宿で小学校でこれらの施設を扱う際、生徒はどのような流れで学習していくのか考察することが出来たと考える。また、2日目と3日目では授業作りをした。これまで巡った場所や実際に巡って感じたことをヒントに子どもたちにとって魅力溢れる授業とはなにかを考えながら計画していった。また、アイデアを出し合い、それに対して意見を出したり、賛同したりととても有意義な時間だったし、「こんなアイデア、考え方があるのか」と自分の視野が広がった。（初等2年）。

この合宿を通して、昨年度よりも新たな視点が見つかった。「どのようにこの素材を使って授業を構成すればいいのか」という視点で町を探検すると、そこには多くの課題や素材が転がっていることが分かる。いつも何気なく通っている通学路にもそのような仕掛けや要素というのはたくさんあるだろう。常にそのようなアンテナを立てて生活することで自分の中での引き出しが多くなるため、今後意識していきたいと思った。また、若狭の素材を使ってプログラムを作成することはとても困難だった。どうしてもありきたりな学習プロセスになってしまい、そのプロセスをつくったことに満足して、子どもたちの姿や思いを置き去りにしてしまっている気がした。斬新なアイデアを思いつけばいいのだが、それは簡単にはいかない。その中で子どもたちの姿を常に想像しながら教育のプログラムをくみだてていく必要があると感じた。（初等3年）。

○ 合宿での学び（抜粋）

- ・授業作りをする際、目的と行動を細かく照らし合わせることは大切であること。・子どもたちの動機づけが授業を発展的にすること。・体験学習は入念な下調べが必要。
- ・地域と児童・学校の結びつきが強いことのできる地域素材を活かした学習・地域側からの学校に対する要望・地域連携教育における企業の立ち位置
- ・若狭町の特産物・梅の生産における問題点・地域資源の教育活用方法・若狭の自然環境・グループでの共同作業・見やすいプレゼン資料・教育現場における地域との関わり方
- ・教師が地域の人とのつながりを大切にして、楽しみながら活動に取り組むこと。

以上の成果を踏まえ、次年度以降も初等3系の基幹科目として2，3年生と地域の協働的な嶺南地域の教育を考える場としたい。

令和 7 年度 福井県嶺南地域における
課題解決事業・プロジェクトに対する支援 実施報告書

プロジェクト名	福井こんぶ Day プロジェクト ～福井の昆布文化を発信する～
代表者	高等教育推進センター・特命講師・江端 弘樹
実施期間	令和 6 年 4 月～令和 7 年 2 月

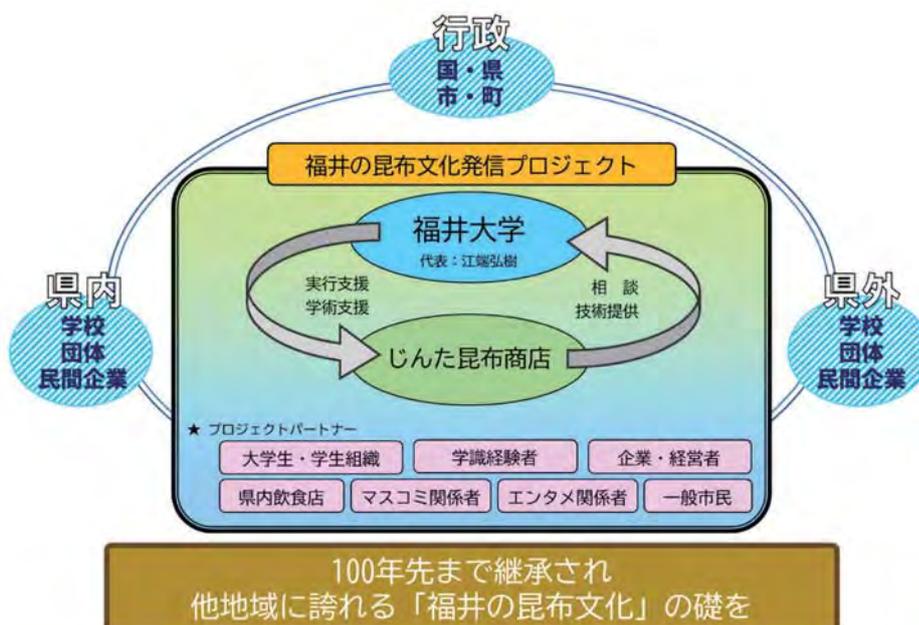
【プロジェクトの目的】

福井県には日本でも独特の海藻食文化が定着している。特に、昆布の利用文化ならびにそれを支える昆布産業は世界に類を見ない。伝統的昆布加工品の代表格である「おぼろ昆布」は職人の手削りでしか作れないが、国内のほとんどの職人が嶺南地域在住者であるなど本県に深く根ざした昆布加工品と言える。また、ユネスコ無形文化遺産に登録された「和食」を支える昆布文化の象徴的存在でもある。しかしながら、福井県民ですら昆布そのものや昆布文化の貴重さへの理解の低さから、若年層を中心に昆布を取り巻く文化(食文化、産業文化)への理解が急速に衰退している。

本事業では、この流れに歯止めをかけ、単なる消費拡大事業ではなく、福井県の貴重な昆布文化を維持・発展させることを目的とし、県内外の様々な立場のメンバーと共に県内を中心に世界中に向け幼い子供を含めた全世代をターゲットに様々な形態で福井の昆布文化を発信する。

【事業の実施体制】

敦賀市におぼろ昆布工房を構える「じんた昆布商店」(代表 甚田久幸氏)と福井大学(プロジェクト代表 江端弘樹)が、それぞれの強みを生かして本プロジェクト「福井こんぶ Day プロジェクト」に取り組んだ。その際、本県の行政・企業・団体・学校ならびに県外の団体・企業らと連携し、プロジェクトを推進させた。



【事業の内容・得られた成果】

本事業は、福井で発達した昆布の加工・流通、食といった特徴的な「昆布文化」を様々なアプローチで全世代を対象に発信するプロジェクトである。令和 4, 5 年度を受けて、今年度には内容を刷新し次に掲げる5つのアプローチでこれに取り組んだ。各アプローチの主な工程は図 1 の通りであり、学内有識者による中間評価を別途実施した。

(A) 小中規模イベントを通じた全世代へのアプローチ

- 県外出身の学生に向けたフィールドワークを通して、福井県内および石川県西部の北前船による交易や伝統工芸技術を発信した。
【活動実績②】、【活動実績⑥】、【活動実績⑱】、【活動実績⑳】、【活動実績㉑】
- 福井大学生協とそれぞれコラボレートし、文京キャンパスならびに松岡キャンパスで限定メニュー「こんぶ Day コラボメニュー」を提供し好評を得た(ふくいこんぶフェア)。
【活動実績⑬】
- こんぶフェア最終日には、昼食時の文京食堂において、甚田氏(おぼろ昆布職人)と私によるトーク&おぼろ昆布生削りショーを開催し、食事で食堂を訪れた学生、教職員に向けて福井昆布文化を発信した。

(B) 大規模イベントを通じた未就学児・小学生世代へのアプローチ

- 福井大学大学祭(越祭)に出展した。福井の昆布文化を支えるのは、北海道での安定したコンブ生産があってこそ。北海道函館市の昆布漁師から提供された生のコンブの形や触り心地を遊びの中で学べる仕掛けを考案し実践した。本学サークル(福井こんぶ応援サークルOBORO)とコラボした。
【活動実績⑤】
- 大規模イベント「こんぶ Day」を坂井市丸岡町高椋コミュニティセンターで開催し(こんぶ Day in 丸岡)、坂井市、同市を拠点に活動する複数の市民活動団体、丸岡高校、本学サークル(アカペラサークル「ふれんど」、落語研究会、福井こんぶ応援サークルOBORO)らとコラボした。福井の昆布文化を遊び、学び、食、エンターテインメントなど多岐に渡る切り口で発信した。
【活動実績⑨】
- 大規模イベント「こんぶ Day」を福井市上森田東ふれあい会館で開催し(こんぶ Day in 上森田東)、地元自治会、本学サークル(福井こんぶ応援サークルOBORO)とコラボした。福井の昆布文化を遊び、学び、食など多岐に渡る切り口で発信した。
【活動実績⑮】
- 札幌市で開催される大規模イベント「こんぶ Day」に参加した(北海道こんぶ Day)。企画ならびに人的提供で主催の特定非営利活動法人北海道こんぶ研究会とコラボし、福井の昆布文化の発信につなげた。
【活動実績⑯】

(C) 文芸イベントを通じた全世代へのアプローチ

- 本学サークル(福井こんぶ応援サークルOBORO)とコラボし、令和 5 年度に実施した「こんぶ川柳コンテスト」を通じた活動が、本学広報誌で紹介された。川柳コンテストや同サークルが紹介されることで、福井の昆布文化の発信につながった。
【活動実績①】
- 新たに「ひかり・きらめき」をテーマに開催した。10 歳以下から 80 歳以上まで全国から約 1,600 句が集まった。生活の中での「コンブ・昆布」の存在を意識してもらう狙いが十分に達成された。また、県内の多数企業の協賛を得て優秀作品には昆布文化や福井の食を代表する品をお送りすることで本県や昆布文化への関心を演出できた。
【活動実績⑩】

(D) エンタメ系を通じた若者世代へのアプローチ

- 本学広報、新聞、テレビ、ラジオなど各種媒体を通して、福井の昆布文化や我々の活動を積極的に発信できた。
【活動実績①】、【活動実績③】、【活動実績④】、【活動実績⑤】、【活動実績⑧】、【活動実績⑩】、【活動実績⑰】、【活動実績⑳】

(E) 講義・公開講座を通じた大学生等へのアプローチ

- 福井の昆布文化を理解し議論するための科目(共通教育科目「海の植物『海藻』を知る」)を学生・市民向けに開講した。
【活動実績⑫】
- 一般市民向け公開講座「おぼろ昆布を知って食を楽しもう」を7,10,2月の計 3 回開催し、昆布文化を中心に発信した。【活動実績⑦】、【活動実績⑭】、【活動実績⑲】
- 生協食堂でのトークライブ、文化施設でのトークショーなど様々な形態で情報発信した。
【活動実績⑬】、【活動実績⑳】
- 大規模イベントにおいても講座を開設し、幅広い世代へ発信した。
【活動実績⑨】、【活動実績⑮】

	令和6年度											
	4月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
(A) 小中規模イベントを通して	開催 ●	開催 ●	開催 ●				開催 ●					
(B) 大規模イベントを通して		開催 ●		開催 ●				開催 ●●				
(C) 文芸イベントを通して				●	開催				●			
(D) エンタメ系を通して		発信 ●●			発信 ●			発信 ●				
(E) 講義・公開講座を通して				開催 ●		開催 ●	後期開講			開催 ●		開催 ●

【今後の展開】

事のおこりは、嶺南地域の伝統的昆布加工品「おぼろ昆布」の認知が県外はおろか、県内でも大変低いことがプロジェクト開始の動機であった。そこで、我々は「福井の昆布文化」の発信を令和4年度から継続的に取り組んできた。地盤のない中で、ゼロからのプロジェクト開始であったが、今年度はマスメディアや自治体等からの依頼も増えてきた(ラジオ出演や新聞コラム、トークショー出演など)。また、地域からの依頼も増え、坂井市のコミュニティセンターや福井市の公民館での開催は、地域への浸透性を表す好例でもある。来年度開催される「大阪・関西万博」日本館での昆布文化発信イベントへの出演も予定されている。

来年度に向けた依頼も数多く、プロジェクトの人手不足から全てお引き受けできない状況である。人材の面では、プロジェクト担い手の退職や卒業が今後の大きな課題である。

以上

令和6年度福井県嶺南地域における課題解決事業・プロジェクト 報告書

○事業名称：令和6年度 理科嶺南地域教材開発・活用プロジェクト

○代表者：山本 博文

○実施期間：2024年6月6日（事前説明会）、6月9日（現地見学会）

○参加者：教員5名、学生15名 計20名

○プロジェクトの目的

嶺南地域の自然活用授業を開発するため、現地での実地研修を行う。この経験を活かし、嶺南地域に強い（理科）教員養成に繋げる。

○プロジェクトの実施内容

6月9日にバスを用いて、嶺南地域の三方五湖周辺の現地見学会（巡検）を行った。三方五湖はラムサール条約にも登録されている自然豊かな景勝地であり、かつ水月湖の湖底に眠る年縞は世界的に見ても非常に重要なものである。しかし、三方五湖の成因や年縞については、地元でも十分に理解されているとはいえず、かつ教育現場においてもなかなかその重要性が理解されず、地元の宝である教材として十分に役立っているとは思えない。

そこで、理科教員を志望する学生を中心に、現地での見学会を実施した。実施にあたり、事前説明として三方五湖の概略を紹介するとともに、湖の成因について考えさせた。現地見学会では、1662年の寛文近江地震時の地変により三方五湖がどのような影響を受けたのか、またその対策工事として何が行われ、この地域にどのような変化があったのか等を、1) 河中神社、2) 浦見運河、3) 塩坂越、4) 梅丈岳、5) 日向湖、6) 早瀬浦等において、地形・地質を順次見学することにより、三方五湖の成因、水月湖の年縞形成プロセス等をより深く理解した。



塩坂越の層状チャート



早瀬の離水海食洞



梅丈岳からの三方五湖全景



バスで移動

○得られた成果

三方五湖は、嶺南地域における理科教育（自然教育）として非常に有用な教材である。しかし、教材として利用するための理解が必ずしも十分進んでいるとは言えない。今回のような現地見学会を含めた三方五湖の研修は、嶺南で活躍する教員には必須であると思われる。今回の参加者らは、教育現場で三方五湖の自然を教材として地元理解を進める上で非常に役に立つと思われる。これまで教員免許状更新講習等でも何度かこの三方五湖を題材に研修を行っており、少しずつではあるが、嶺南の自然の宝物という理解が進んでいると思われる。研修を受けた学生が、教員として学校現場で子供たちに三方五湖の自然を紹介することで、地元の宝物という理解がさらに進むことを期待している。

○今後の展開（事業の継続が見込まれている場合）

三方五湖の成り立ちや重要性を理解している教員の数はまだ十分とはとても言うことができず、この事業を継続することにより、三方五湖の成り立ちやその重要性を伝えていくことができる教員の数を増やしていかなければならない。

令和6年度福井県嶺南地域における課題解決事業・プロジェクトに対する支援 事業終了報告書

プロジェクト名称：令和6年度嶺南地域教育プログラム交流・研修会

代表者：湊 七雄（教員養成領域・教授、教育学部 特命事項担当副学部長）

実施期間：令和6年7月12日（金）

プロジェクトの目的：本事業は、福井大学における嶺南地域枠入試を経て入学した1年生、嶺南地域教育プログラムを受講している2・3年生、プログラム担当教員、および嶺南地域の教育委員会関係者等が交流することを目的とし、参加者が嶺南地域に対する理解を深めるとともに、地域の教育課題解決に向けた教員養成に貢献することを目指した。

プロジェクトの実施内容：

本年度は、嶺南地域6市町のうち敦賀市を訪問地として選定し、以下の内容で交流・研修会を実施した。

日時：令和6年7月12日（金）

場所：敦賀市角鹿小中学校、福井大学附属原子力工学研究所

スケジュール：

12:10 福井大学文京キャンパス1号館前に集合

13:40 敦賀市角鹿小中学校到着

14:00 授業参観

14:30 小学校・中学校を自由に参観

15:00 校長より説明

15:20 施設見学

15:45 質疑応答

16:00 敦賀市角鹿小中学校出発

16:30 福井大学附属原子力工学研究所着

16:45 交流・研修会

17:50 交流会（夕食を兼ねて実施）

18:30 交流会終了

18:40 福井大学附属原子力工学研究所出発

19:50 福井大学文京キャンパス帰着、解散

この交流・研修会は、令和5年度に小浜市で実施した研修会に続くもので、敦賀市教育委員会の協力を得て行われた。

得られた成果：

(1)参加学生のモチベーション向上

新1年生から3年生までの計24～36名が参加し、嶺南地域での教員志望を強く意識する契機となった。

(2)地域教育関係者とのネットワーク構築

敦賀市教育委員会との連携を強化し、次年度以降のさらなる交流機会を確保。

(3)地域理解の深化

学生が地域資源について学び、将来的な教員として地域教育にどのように貢献できるかを具体的に考える機会を得た。

今後の展開：

本事業は、嶺南地域6市町をローテーションで訪問する計画の2年目にあたる。今後も地域教育プログラムの一環として、訪問先の拡大、教育現場での実践強化、地域課題解決に向けた実践的プログラムの開発を進めていく。次年度はおおい町を訪問し、小・中学校での授業参観や児童・生徒との交流活動を組み込む予定である。また、各市町が抱える教育課題に対応した学習プログラムを開発し、地域の教育関係者と協力して実施することで、学生がより実践的な経験を積める機会を提供する。これらの取組を通じ、嶺南地域の教員を目指す学生の育成を継続し、地域教育の発展に貢献することを目指す。



集合写真@敦賀市角鹿小中学校

【事業名称】 教育学部 嶺南地域枠入試合格者のための入学前教育

【代表者】 大久保 貢

【実施期間】 令和6年12月14日～令和7年3月19日

【活動内容】

(事業の目的)

教育学部嶺南地域枠入試（学校推薦型選抜Ⅰ）は大学入学共通テストを課さない入学者選抜である。そのため、合格発表が12月と早期に合格者が決定する。教育学部とアドミッションセンターでは教育学部 嶺南地域枠入試の合格者に対して入学までの約3か月間を大学で学ぶための準備期間として有意義に過ごしてもらうための入学前教育プログラムを実施した。

(事業の内容)

入学前教育は、オリエンテーション、課題1、課題2、課題3、振り返りから成っている。

『課題1』は「嶺南地域理解に関する課題」について、合格者を3グループに分けてオンラインにてグループ発表を行った。内容、目的、取り組み期間は下記のとおりである。

<内容>

嶺南地域と嶺北地域の比較などを通じて、嶺南地域の課題・特徴等を各自で発見し、個人で調査したことをグループ内で比較してまとめた。

<目的>

- ・ 嶺南地域の特徴を理解し、嶺南地域を支える小中高の教員を目指す。
- ・ 与えられたテーマのもと、各自及びチームで課題を発見し、チームで課題探究を進められる。
- ・ 課題探究の成果を一般市民に分かりやすく伝えられる。

<取り組み期間>

令和6年12月24日～令和7年1月30日で、2月9日にオンラインで成果発表会を行った。

『課題2』は教科に関する課題の作成と添削指導を目的に行った。課題図書として「14歳からの哲学～考えるための教科書～」を与え小論文を課し、添削指導を行った。

『課題3』は教育に関する課題の作成と添削指導を目的に行った。課題図書として「窓ぎわのトットちゃん」を与え小論文を課し、添削指導を行った。

「振り返り」

令和7年3月19日にオンラインにて、この入学前教育に関する「振り返り」を行

い、入学前教育の感想や入学後の抱負について発表した。また、学部教員から合格者へ励ましの言葉を送った。参加者は下記のとおりである。合格者 11 名、入学前教育を指導した学部教職員 8 名。

【成果】

「振り返り」において、入学前教育プログラムに対する合格者からの感想を下記に示した。

「課題 1」に関する感想

・嶺南地域に関する知識が足りず調べた情報も自信がなかったのですが、他のメンバーや先生のサポートもありスライド作成できました。他のグループワークのレベルの高さを感じたので、大学入学後もっと頑張りたいと思いました。

・オンラインでしか話すことができなかつたため、嶺南地域に関する活動にあたって難しいところがたくさんありましたが、やり遂げられたのでよかったです。個人での活動でも自分が調べたいことを積極的に調べることができ、学びも深めることができた。

・嶺北の人たちの実体験を聞くことでさらに嶺南に関する理解を深めることができたし、協力して初対面の人たちと取り組みコミュニケーション力や協働性を伸ばすことに繋がったと思いました。

「課題 2」に関する感想

・私は哲学に興味があり、この本を読んで考えるとは何か、考えた先になにがあるのかについて深く考えることができました。そして、その考えを言語化に出来て良かったと思いました。

・高校時代にあまり本を読む機会が少なかったため、この課題により本を読んで考える機会になって良かった。大学入学後は、レポート課題が多いようなので、この課題によりレポートにまとめるコツを掴んだと思います。

・考えると言うことについて、自分の中での曖昧なことを分かりやすく説明することが難しかったです。この「課題 2」で自分の弱点が見つかり、大学入学後、この弱点を克服して頑張りたいと思います。

「課題 3」に関する感想

・「窓ぎわのトットちゃん」を読んで、いろいろな子供たちの思いや声を聞くことの

大切さにさらに気づき、いろいろな子どもたちと寄り添えられる教員になりたいと強く思いました。

・課題図書である「窓ぎわのトットちゃん」を読んで、この本に出てくる先生は、私の目指している教師像に非常に近く、子供たちのありのままを受け止め、成長させる事のできる為に具体的にどのような方法があるのかを考える事が出来ました。この本を読んで、さらにこのような教師（特別支援の教師）を目指して頑張りたいと思いました。

以上のように、教育学部 嶺南地域枠入試合格者のための入学前教育プログラムを実施した結果、次の2点の成果が得られた。1点目は嶺南地域の課題・特徴を自ら理解したこと。2点目は入学までの3か月間、勉学に対するモチベーションを維持したこと。この入学前教育の実践で培った多様な学習成果を基盤として、大学入学後、嶺南地域を支える小中高の教師を目指して頑張りたい。

令和6年度福井県嶺南地域における課題解決事業・プロジェクト事業報告書

(1) プロジェクトの名称、代表者

名 称：嶺南地区における学校拠点を中心とした教育支援活動

代表者：連合教職開発研究科長 木村 優

(2) 実施期間 令和6年4月1日～令和7年2月27日

(3) プロジェクトの目的

嶺南教育事務所や嶺南地区の拠点校、連携校等と連携し、嶺南地区における協働研究など教育活動の推進及び課題解決学習や探究学習の先進的取組としての発信を進め、児童生徒だけでなく嶺南地区の活性化に資することを目的とする。

(4) 実施内容

嶺南地区出身の学校教員経験者をコーディネーターリサーチャーとして3名配置し（敦賀市、小浜市、高浜町の3拠点）、嶺南地域の各学校や嶺南教育事務所と教職大学院が連携協働し、嶺南地区の学校拠点での実践研究（学校現場での長期インターンシップ・実習）及び学校での課題研究の支援を行った。

(5) 得られた成果

学生が嶺南地区の教育現場と関わることで、嶺南地区の魅力を知り、教員志望者の少ない嶺南地域の教員志望者の増加につながる環境づくりに貢献した。

探究的なふるさと学習を進め出している嶺南地区の教育の理解と支援を進め、先進地区として発信した。

地域に根差した課題研究は、課題研究そのものに加え、中高生が大人になったときに課題研究等を通して接した地域に根付く環境づくりに貢献した。

[令和6年度嶺南地区拠点校、連携校、関係機関]

(小学校) 美浜東小学校、本郷小学校

(中学校) 内浦中学校、栗野中学校、小浜中学校

(高等学校) 若狭高等学校、若狭東高等学校

(行政機関) 嶺南教育事務所

また、幼児教育から小中高大とつながる長いスパンでのふるさと教育や探究的な学びを支えるため、各学校の校内研修の高度化支援を行った。嶺南地区の学校間・異校種間が連携した「探究的なふるさと学習」の充実と「つきたい力」の系

統化を図った実践により、嶺南の子どもたちに「ふるさと愛」を育むとともに、将来必要となる「自ら問いをつくる力」「対話力」「協働する力」「発信力」「問題解決力」等の「資質・能力」育成に寄与した。

名称	内容	対象者
「嶺南の教育」向上会議	<ul style="list-style-type: none"> ・ 嶺南卒入試に伴う嶺南プログラムの実施に係る協議 ・ 嶺南地域での教育実習に伴う支援に係る協議 	嶺南地域幼・小・中・高の校長、関係市町教育委員会関係者
嶺南地域教育プログラム実施連携協議会	福井大学嶺南地域教育プログラムの運営会議	福井大学嶺南地域教育プログラム関係者
『嶺南ふるさと学習』推進プロジェクト	嶺南教育事務所、嶺南地区教育委員会、嶺南の小中学校・県立学校が参加して「探究的なふるさと学習」の充実を目指す	嶺南地域幼・小・中・高の管理職、教諭、関係市町教育委員会関係者、福井大学嶺南地域教育プログラム関係者
嶺南教育実践フォーラム	嶺南教育事務所教育研究発表会	嶺南地域幼・小・中・高の管理職、教諭、関係市町教育委員会関係者、福井大学嶺南地域教育プログラム関係者
実践研究福井ラウンドテーブル	嶺南の教育現場での実践に係る講演および実践報告	嶺南地域幼・小・中・高の管理職、教諭、関係市町教育委員会関係者、福井大学嶺南地域教育プログラム関係者、県内外の教員、研究者、生徒・児童、文科省職員、NITS職員、民間企業スタッフ、海外大学教員等

(6) 今後の展開

嶺南地区における協働研究など教育活動の推進及び課題解決学習や探究学習の先進的取組としての発信する場として、嶺南教育事務所や嶺南地区の連携校等学校を超えての展開を図り、さらに連合教職開発研究科が開催する実践研究福井ラウンドテーブルにおいて全国に発信する場を生み出し、教育の力でより嶺南地区の活性化を促す。

「令和6年度福井県嶺南地域における課題解決事業・プロジェクトに対する支援」報告書

1 プロジェクトの名称、代表者名（所属・役職）

「嶺南地域の学校における探究学習推進プログラム」、
清川亨（連合教職開発研究科・教授）

2 実施期間

令和6年5月1日（水）～令和7年2月27日（木）

3 プロジェクトの目的

嶺南地域の今後を支えていく児童生徒が課題解決に向けた取組みの経験値を増やしていくことは極めて重要である。しかし、未だ多くの学校では「総合的な学習の時間」（高校では「総合的な探究の時間」）で行われる課題解決学習が調べ学習にとどまっている現状にある。本プログラムは学校における探究学習の支援・推進を通して、嶺南の児童生徒の課題解決に向けた資質・能力の向上を目指すことを目的とした。

4 プロジェクトの実施内容

（1）中学校、高校の現状確認

今回、嶺南地区嶺南地区のほぼ中央に位置する若狭町の上中中学校と三方中学校、両校からの進学者が多い美方高校と若狭高校を対象校と考え開始した。

4校の探究学習（以下、課題解決学習ではなく学校でよく使われている探究の言葉を使用することとする）の現状を4月下旬に4校の校長先生との面談を通して確認した。その結果、若狭高校では生徒が主体となってテーマ設定から検証、考察に係る一連の探究活動（OECD2030StudentAgencyでは、Anticipation（見通し）・Action（行動）・Reflection（振り返り）の頭文字をとりAARサイクルと呼んでいる）を行っていることが分かった。美方高校でも探究学習の流れに沿った生徒の活動ができていることが分かった。中学校2校では、教員・生徒共にテーマ設定や検証活動がなんとなく行われていたり、ややもすると課題研究発表会が目的化してしまうため活動が調べ学習的になっている現状があると認識した。このことから上中中学校、三方中学校を中心に支援を行うこととした。

（2）教員支援

生徒の活動の鍵を握るのは教員である。探究学習は調べ学習のことだと認識して慣習的な指導を行っているには本来の探究学習への転換を図り、嶺南の児童生徒の課題解決に向けた資質・能力の向上することは難しい。校長先生との面談でも探究学習への考え方や生徒へのかかわり方に悩む教員がいるとの声があり、まずは現状から動き出すことを目指して下表のような教員支援等を行った。なお太枠は特定の学校ではなく嶺南地区の公立学校全校に案内を出して行ったものである。

また、上中中学校からの異動者が在籍する大島小学校に上中中学校の様子が伝わったことで、大島小学校の校長先生からの探究学習を進めるための要請があり、小学校ではあるが年度途中から同校への支援も行った。

更に、嶺南地区を対象とした探究に係る研修会も行ったが、当該研修の講師が推薦する学校へ、今回の支援を行う上中中学校等の教員と先進地視察を行った。視察は参加者が探究的に行うようにし、その結果を嶺南地区教務主任会をベースとした情報共有会を行い、嶺南地区への還元を行った。

日時	対象校	参加者・数	内容	支援者	備考
5/1(水)	三方中	校長、研究主任等 2 名	探究学習の現状と教員の課題意識の共有	清川	対面
5/2(木)	上中中	校長・教頭、研究主任等 2 名	職員研修会打合せ	清川	対面
5/13(月)	上中中	全教職員 20 名	職員研修会「探究学習とは」	清川	対面
6/21(金)	上中中	校長・教頭、研究主任 2 名	探究学習の進捗と課題の共有	清川	対面
7/11(木)	上中中	校長・教頭、研究主任等 2 名 嶺南機養育事務所員 4 名	教科の授業における探究的活動の導入を目指した提案授業と授業研究会	清川	対面
7/18(木)	三方中	研修主任等 2 名	教科の授業における探究的活動を導入した授業研究会	清川	対面
8/28(水)	嶺南全校等	嶺南の小中高教員、嶺南教育事務所員、計 39 名	研修会「探究学習支援の壁を乗り越えよう！」	※ 1	オンライン
9/6(金)	大島小	校長、研究主任	職員研修会打合せ	清川	対面
9/12(木)	美方高	校長、研究主任	探究活動の現状確認と情報共有	清川	対面
9/13(金)	上中中	校長・教頭、研究主任等 4 名	課題解決学習の現状からの成果と課題の共有	清川	対面
9/20(金)	三方中	研究主任等 4 名	課題解決学習の現状からの成果と課題の共有	清川	対面
9/27(金)	上中中	校長・教頭、研究主任等 2 名	課題解決学習の現状からの成果と課題の共有	清川	対面
10/4(金)	三方中	研究主任等 4 名	課題解決学習の現状からの成果と課題の共有	清川	対面
10/25(金)	上中中	校長・教頭、研究主任等 2 名	課題解決学習の現状からの成果と課題の共有	清川	対面
10/28(月)	大島小	全教職員 10 名	職員研修会「小学校における探究学習」	清川	対面
10/31(木)	三方中	校長、研究主任	職員研修会打合せ	清川	対面
11/13(水)	上中中	教頭	福井県教育総合研究所・嶺南教育事務所共催研修会での事例発表 「探究学習に係る校内研修」打合せ	清川	対面
12/10(火)	三方中	全教職員 25 名	職員研修会「探究学習を再考する」	清川	対面
12/13(金)	上中中	教頭、研修主任	「中間発表会」を終えての今後の展開	清川	対面
12/23(月)	嶺南全校等	嶺南の小中高教員、嶺南教育事務所員、計 18 名	研修会「探究学習を進めるためのカンファレンス」	※ 2	対面 ※ 3

1/6(月)	嶺南全校等	嶺南の小中高教員、嶺南教育事務所員、計 13 名	研修会「続・探究学習支援の壁を乗り越えよう！」	※1	オンライン
1/15(水) 1/16(木)	上中中 三方中	探究担当教員各 1 名計 2 名	探究学習先進校視察（熊本市北部中学校、熊本県立宇土中学校・高等学校）	清川	現地視察
1/31(金)	大島小	校長、研究主任	ループリックの活用方法	清川	オンライン
2/26(水)	美方高校	探究担当教員 1 名、清川同行	探究学習先進校視察（熊本市北部中学校、熊本県立宇土中学校・高等学校）	清川	現地視察
2/27(木)	嶺南全校等	嶺南の小中高教員、嶺南教育事務所員、計 28 名	探究的な先進校視察の共有	清川	オンライン

※1：講師は前田康裕（熊本大学大学院教育学研究科・特任教授）氏

※2：講師は澤田真由美（「先生の幸せ研究所」代表）氏

※3：会場は嶺南教育事務所

(3) 生徒支援

教員支援と並行して、課題解決学習に取り組む生徒の支援も行った。上中中学校では個人で、三方中学校はグループで探究を行っているが、県内外の多くの学校では教員が引いたレールの上を生徒が走るような実態が未だ散見されることがあるが、この2校についてはその状態から脱却を進めようとしているところであった。そこで、探究活動を行っている生徒に対して、主体的なテーマ設定や検証活動が行われるように下表のような支援を行った。

日時	学校	対象学年等	内容	実施者	備考
6/21(金)	上中中	1～3 年の一部生徒	課題解決学習のテーマ設定支援	清川	対面
7/11(木)	上中中	3 年 1 組	主体的対話的で深い学びの経験（理科「細胞分裂」）	清川	対面
9/13(金)	上中中	1～3 年の一部生徒	課題解決学習の検証活動の支援(記録の意味など)	清川	対面
9/20(金)	三方中	1～3 年の一部生徒	課題解決学習の検証活動の支援(記録の意味など)	清川	対面
9/27(金)	上中中	1～3 年の一部生徒	課題解決学習の検証活動の支援(記録の方法など)	清川	対面
10/4(金)	三方中	1～3 年の一部生徒	課題解決学習の検証活動の支援(記録の方法など)	清川	対面
10/25(金)	上中中	1～3 年の一部生徒	課題解決学習の検証活動の支援(記録の活用)	清川	対面
12/13(金)	三方中	1～3 年の一部生徒	「中間発表会」発表への質疑	清川	対面

5 得られた成果

上中中学校では、年度の早い段階で探究に係る校内研修を実施できたこと、そして管理職や探究学習担当教員とのそれぞれの時期での成果と課題を多く共有できたことから、探究学習の流れの形だけを真似る学習活動から、生徒の疑問をテーマとして探究学習を進められたことがまず成果として挙げられる。そして、学習期間に生徒が当事者意識を持って行動したプロセスを通じて課題解決学習の方法を身に付け始めたことも成果として挙げられる。また、課題研究発表会は調べ学習の結果を発表する場ではないとの意識を教員が持ったことも成果として挙げられる。課題解決学習の方法やプロセスを教員と生徒自身が評価するためのルーブリックを作成し活用を始めたことも成果と言える。更に、上中中学校では、教員がそれぞれにテーマを設定して教育活動を行う、つまり教員が探究することを始めたことも成果である。

三方中学校では、校内研修「探究学習を再考する」において「教員が何でも準備しすぎているのではないか。何のために探究（課題解決学習）をしているのかを原点に戻って考える必要がある。」などの声が出て、職員全体で次年度に向けた探究学習の再構成をしなければいけないとの認識を学校として持てた。次年度の探究再構築に向けてグループ別に検討を進めている。

また、上中中学校、三方中学校に留まらず、嶺南地区の公立学校を対象として行った外部講師による3回の研修については、8/28の研修で参加者が児童生徒の探究の前に教員が探究（課題解決学習）をしなければならないと「探究学習を探究する」の意識を持ち、その実践を1/6の研修で報告共有した。12/23の研修では、なんでも教えてあげるのが良い教員であるなどのバイアスを取り除き、育てたい生徒育成のために総合的な学習の時間以外も含めた様々な場面で生徒が探究をするような支援が大事であるとの認識を参加者が持てた。

先進校視察では、自校の探究活動に課題意識を持った参加者が視察に向けてテーマを設定し探究的な視察を行うことができた。そして嶺南教育事務所員も含めた嶺南地区の小中高校の教員参加のもとに視察報告会を2/27に開催した。視察者が探究的な視察を行った事、視察の情報共有により視察報告会参加者が自校での教育活動に対して探究的に改善をすすめようとの意識を持ったことが成果として挙げられる。また、3回の講師による研修および視察の共有により、嶺南の各校の取組み状況を共有することが横糸となり、点であった各校の取組みが線、面でつながることで嶺南地区全体として探究学習（課題解決学習）が進むのではないかとの認識を研修会等参加者および嶺南教育事務所が持ったことが成果である。

上中中学校、三方中学校の生徒への直接支援では、生徒達が抽象的な言葉で探究を進める傾向にある現状から、自分事になるように具体化する問いかけ等の支援を行ったが、今回関わった生徒たちは探究する言葉を具体化することで自分事として捉え、当事者意識を持った探究（課題解決学習）に取り組んだことを成果として挙げておきたい。

6 今後の展開

次年度は、上中中学校では教員自身の探究サイクルを回すことを支援し、探究スパイラルループの定着を図りたい。これにより生徒の探究学習への教員の関わり方がどのように変化していくのかを確認し、嶺南地区にその状況を広めたい。三方中学校では、なんでも教員が準備することから脱却することを教員が意識して探究学習に取り組む初年度

になるが、都度迷いや疑問などが生じることが予想されるため、その部分について支援をしていきたい。その際、教員が生徒が自分事として動き出すのを待てるかが鍵を握ると考えるが、三方中学校における教員の行動変容のプロセスを嶺南地区に共有したい。また、今年度動き出した大島小学校を引き続き支援することで小学校への展開や探究学習に係る小中学校の連携について探りたい。

併せて、嶺南教育事務所と連携しながら、嶺南地区の学校の情報共有の場を作ることによって嶺南地区の探究学習のネットワークづくりの一步を踏み出したい。

これらのことを進めることで嶺南地区の児童生徒が自らが課題を見つけ、個人あるいはグループで探究学習を進め、児童生徒が課題解決学習の方法を身に付けることを目指したい。

予算執行の見直しをし、12月に予算の廃止を行った。

5. まとめ 成果として

成果としては、①多職種連携教育、②町民との連携、の2点あげられる。

6月7日、国際地域学部生と、ちえなみきプロジェクト参加学生を紐づけし、「職種の違いを超えて包括的に課題に対処できる資質・能力を培う教育」として多職種連携教育を実装した。当日は、編集工学研究所を講師に招き「情報と情報をつなぐセミナー」を開催した。7月5日、工学部生とシェアサイクルを活用しながら市内5か所を視察した。両日とも、異なる学部生が議論しやすいよう、情報を共有しながら自由な発想と、他者理解の促進に努めるワークを行った。この様子は、広報紙（レター）として嶺南地域共創センターのホームページに掲載した。

但し、中期計画の多職種連携教育の成果として、今年度は試行段階とみてカウントはしない旨、地域連携推進課の坂井課長に複数回申し出た。理由として、実装の旗振り役が不明のまま、関係教員に意思形成、状況確認、授業内容の変更等の点で負担をきたしたが、現在まで学修形態の導入の検証がない点が挙げられる。特に、多職種の連携によって学生の能力、資質に涵養が創発されたのか等のプロセスの検証は重要である。多職種連携教育の取り組みの核が、多職種との連携なればこそ、実施体制構築の議論や、発展的検証の機会が担当課（未だ不明）と教員との間で検証されていない以上、関係教員からの「現段階ではカウントは控えたい」との申し出を尊重したい。次年度以降の体制面での課題として頂きたい。

2点目、この点で、町民との連携の機会を多々、設けることができ、多様な主体を巻き込む耐性が得られたものとする。

本プロジェクトは、嶺南地域共創センター支援によって、実装することが出来ました。厚く御礼を申し上げます。

敦賀市知育・啓発施設ちえなみきにおける「知の共創」プロジェクト
嘉瀬井恵子（地域創生推進本部）

1. はじめに；プロジェクト研究の目的

申請者らは、令和5年度より、敦賀市知育・啓発施設「ちえなみき」（以下「ちえなみき」と略記）において、「ちえなみき」を運営管理する丸善雄松堂（産）、公設自治体である敦賀市（官）、福井大学（学）の産官学の共創による「知」を創造するプロジェクトを実施している。この間、「ちえなみき」を拠点とした学びや地域活動など、持続可能ある地域活動を創造していく基盤を構築してきた。

昨年度同様に、学生に対しては「多様な価値観をつなげること」「次世代とのつながりも考慮すること」「ちえなみきを軸に地域とのつながりを意識すること」の3点を強調して指導した。それは、「学生にとっては、きっと何かを学べるであろう」との楽観論を否定し、「他者とのつながりから『解』を創る学び」を産官学で重視したからである。そこで、続く令和6年度においても、継続して「知」を共創しつつ地域社会を実装することを目的とする。これにより、人口減少と高齢化が加速する地方において、次世代の成長を支える「学び」の基盤形成が可能となる。

2. 2024年度プロジェクト研究の実施概要

2-1. プロジェクトの実施体制

本活動では、地域を知り、多様なステークホルダーと繋がるとともに、知を探究し、創造し、実装することをねらいとした。その実現のため、研究代表を嘉瀬井恵子（地域創生推進本部）が務め、メンターとして敦賀市まちづくり観光部、丸善雄松堂株式会社、同金沢支店、ちえなみきに助言協力を頂く体制とした（敬称略）。

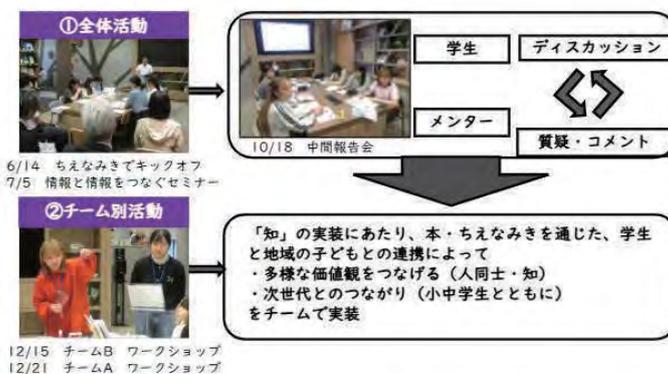


図1 活動の見取り図

2-2. 学生の活動

参加学生については教育学部生7名（3年生；5名、2年生；2名）である。3年生2チーム（チームA、B）と2年生1チーム（チームF）の全体で3チームによる活動とした。

教育の実践的枠組みとしては、①学生全員で意見や情報を共有する「全体活動」、②チーム毎に知を自由に提案する「チーム別活動」の2形態を同時進行で実施した

(図1)。この過程において、学生が自ら他者や地域と共に「知」を創造、実装し、得られた「知」を次世代にコンテンツとして伝え残すことを学びのゴールとした。

2-3. スケジュール

実施期間は、2024年6月14日(金)～2025年2月14日(金)の一年間の活動とし、途中、教育実習期間は除外した(表1)。

表1 活動スケジュール

日程	全体	チーム名	活動
6月14日	○		キックオフにて顔合わせ
7月5日	○		「編集術を使って情報の見方を動かすセミナー」
10月18日	○		中間報告会
11月5日～7日		F	第26回図書館総合展2024ポスターセッション
11月21日		F	「行ってきました！図書館総合展」(オンライン)
12月15日		B	「福井大学生と一緒に！とっておきの絵本の場面で！キーホルダーを作ろう」ワークショップ
12月21日		A	「福井大学生と自分だけのブックツリーをつくろう！」ワークショップ
2月5日～14日	○		2023年度、2024年度活動展示会
2月14日	○		成果報告会
3月12日		F	「知の魅力本」発行

3. チーム別の知の実装活動

3-1. 「福井大学生と自分だけのブックツリーをつくろう！」

チームAによる、本好きな子どもはもとより、普段本に触れる機会の少ない子どもに対し、普段読むことの無いジャンルに触れる機会を作ることをねらいとしたワークショップイベントを実施した。参加学生が児童向けに本を複数、選本し、ワークショップに参加した児童がそれらの本を選ぶという、学生と児童がともに本を選ぶ過程を重視した企画である。

3-2. 「福井大学生と一緒に！とっておきの絵本の場面で！キーホルダーを作ろう」

チームBによる小学生を対象に、本への興味促進や愛着を形成し、本を読むきっかけをつくることを目的としたワークショップを実施した。

本への興味を深めることを狙いに、本に描かれた好きな場面を参加児童自らが絵に描いて、キーホルダーにする企画とした。また、愛着形成の観点からは、キーホルダーに描いた絵を見るたびに、本の場面や本そのものを思い出すことを想定している。また、ワークショップでは、参加児童が選んだ本のキャッチコピーを考え、共有することで、人との関わりや、本の出会いの機会を多くすることも狙いとしている。

3-3. 「魅力本作り」

2年生であるチームFは、聴講生として、今年度の実装したプロジェクトの学生生活をまとめた「知の魅力本」の冊子を制作する（現在、印刷待ち）。

また、知や本を介した他大学や企業の活動を修得する目的で、第26回図書館総合展（みなとみらい・パシフィコ横浜）のポスターセッションに学生とともに参加をした（「4-2」参照）。

4. 学生の関心に合わせた個別の取り組み

学生全体で活動を報告し合う以外にも、興味・関心に合わせ、種々の企画に参加をすることで、知への貢献、地域との連携を図った。

4-1. 編集術を使って情報の見方を動かすセミナー

7月14日（金）（13:15~16:30）編集工学研究所による「編集術を使って情報の見方を動かすセミナー」を実施し、①「編集術を使った情報編集術」、②情報を編集する技術を学ぶワークショップ、目次読書法を行った。

4-2. 第26回「図書館総合展」ポスター出展・図書館総合展オンライン

11月5日（火）～7日（水）、パシフィコ横浜で開催された図書館界最大のコンベンションである第26回図書館総合展に、福井大学地域創生推進本部として「子どもの知を育む本との関わり～敦賀市における『知の創造』プロジェクトの事例から～」とのタイトルでポスターセッションに参加した。昨年度のチーム活動を、セレンディピティの観点から本との接近の可能性を分析した内容で、多くの来場者に関心をもって頂いた。また、本ポスターは、ブレインテック賞を受賞した。

また、11月21日（木）、図書館総合展オンライン「行ってきました！図書館総合展」にも参加し、図書館総合展の魅力、本取り組みについて報告をした。



図2 「第26回図書館総合展」出展ポスター

5. 研究（成果）の発信

5-1. 講演：北國総研ビジネス懇話会

「知のまちづくりをリードする敦賀駅前書店」（4月23日・北國新聞交流ホール）とのタイトルで登壇、北國新聞の広報誌にも当該、講演要旨が掲載。

5-2. 「知の創造 in ちえなみき」ニュースレター

学生の活動を記録し、発信、情報共有を目的として、2023年6月の第1号から、現在、第20号まで発行し、嶺南地域共創センターのホームページに掲載している。これらは敦賀市都市整備部、丸善雄松堂本店・支店の役職員以下、回覧していると聞いている。学外から好評を得ており、県外からの問合せや視察がある。

5-3. 学会

社会デザイン学会第19回年次大会（2024年7月7日）において、「地方都市における、社会共創一知の創造活動から考える」とのタイトルで報告した。また、社会デザイン学会学会誌 socialdesignVOL16に「産官学共創による『知の創造』活動」とのタイトルで掲載予定である（2025年3月刊行予定）

6. まとめ 成果として

成果として①多職種連携教育、②サービス・ラーニングとしての意義2点がある。

7月5日、国際地域学部「課題解決型プロジェクト」の履修学生と、本プロジェクト学生を紐づけし、「職種の違いを超えて包括的に課題に対処できる資質・能力を培う教育」として多職種連携教育の場として。当日は、異なる学部生が議論しやすいよう、「情報と情報をつなぐセミナー」（編集工学研究所）の開催を立案し、「情報」をキータームに、情報を共有することで、自由な発想、他者理解の促進に努めた。

但し、中期計画の多職種連携教育の推進としては成果としてのカウントはしない旨、地域連携推進課の坂井課長に複数回申し出た。理由としては、①実装にあたっての実施体制の構築がなく（旗振り役が不明）関係教員に負担（意思形成、状況確認、授業内容の変更等の影響）をきたしたという体制の点のみならず、②現在まで学修形態の導入の検証がない点が挙げられる。特に後者は、多職種を連携した際のどの点、プロセスに、学生の能力、資質に涵養が創発されたのかの検証は、今後の多職種連携教育の推進の鍵となると思われる。多職種連携教育の取り組みが、多職種との連携を重視するならば、次年度にむけた発展的検証の機会が担当課（未だ不明）と教員との間で検証されていない以上、関係教員からの「現段階ではカウントは控えたい」との申し出を尊重したい。今年度は試行段階としてカウントはせず、次年度以降、多職種連携教育の再構築をして頂きたい。

2点目、サービス・ラーニングとしての成果であるが、本プロジェクトは、将来を背負う若者世代の学生に対する教育活動に際しては、利他性の涵養を重視したいとの産学官共通の意思の上で活動を進めた。もっとも、本来、学びとは自分の為にするという前提があり、学びがもたらす成果は当事者たる自分自身にこそまずは還元されるとの想定がある。故に、自分ではなく、他者や地域の為に「知」を伝え残すという学びは、一見不合理に思える。だが、新幹線駅としての新しい顔を持つこととなる地域、あるいは人

口が少ない地方においては、利他性こそがそれらの地域的懸念要素をつなぎ合わせる導きの糸となると判断した。そして、この方向性は一定の成果はあったものとする。例えば、2002年7月29日の中央教育審議会における「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について（答申）」の「参考資料」において、サービス・ラーニングとは「社会の要請に対応した社会貢献活動に学生が実際に参加することを通じて、体験的に学習するとともに、社会に対する責任感等を養う教育方法」¹とされている。本事例のような利他的経験の学びは、このようなサービス・ラーニングとしての意義を捉えた成果とも言える。この点で、高等教育機関の少ない地方や人口減少に悩む地域、実装側の双方にとって、多様な主体を巻き込む耐性が得られたものとする。このように、本プロジェクト研究によって、次世代の学びを敦賀（ちえなみき）で支える一つの好個のモデルとなったと思われる。

但し、課題もある。近年の産官学共創、実装の場の新規性への注目もあり、本学学生でも科目履修生でも市民開放講座履修生でも、協定も結んでいない他大学の一般人が、事前に当方や産官に連絡、相談、説明もなく、本学他学部の教員からの指示として、自らを参加学生だと強く主張して加入してきた（他大学曰く、本人は2024年1月末に参加を決め、3月7日には他大学内で当該学生の参加が共有されていた事が事後に判明。本採択は2024年4月26日であり、本学学生でも1、3月は参加未定段階。本学学生より先に他大学生の参加が進められた不可解さ）。一般人（他大学生）の加入については、本来の参加者である本学学生が不快（プロジェクト後、泣きながら疑問視）を示し、産官も相当な理由により参加に難色を示されるなど、（当方の預かり知らぬものであったとはいえ）プロジェクト関係者に心配と迷惑をおかけた。大学規定やプロジェクト申請書に記載のない一般人（他大学生）をプロジェクト関係者に相談（他大学生の履修の目的と本プロジェクトへの効果、知財の責任や安全管理、手続きの有無、産官への説明の有無等）なく、独断で参加させることは①本学学生への精神面等の悪影響を及ぼす点、②一般人（他大学生）への研究費の負担は本学学生の公平性を損なう点、③産官が指摘する管理責任面での困難を招く点、④審議を経て採択した以上、理由もない参加者を事後に認めることは、他の審査との公平性を欠く点、等々の社会共創の上で混乱を招く。また、当該一般人（他大学生）も、活動内容に対する無理解が甚だしく、本学学生の学びの目的が大きく異なった点も混乱をきたした。本件につき、教員間（他大学生を誘った教員、当方）のコミュニケーション不足が原因とみる職員がいたが、多くの教員が指摘するように手続きの問題であり、手続きに正当性が認められた上で初めて、コミュニケーションがある（但し、たとえコミュニケーションがあったとしても共創先の合意も社会共創上は必要）。共創センターが「共創」たるためには、共創への理解に加え、一般的な社会としての手続き論（自大学生の公正を保つ）への理解が必要だと思われる。

本活動は嶺南地域共創センター支援によって実装した。御礼を申し上げる。

¹ https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1287510.htm 文部科学省 HP

令和6年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	美浜町における全天候型あそび場施設の計画に関する研究		
代表者名	西本雅人	代表者所属・役職	建築・都市環境工 学科・准教授

(1) 期間
2024年6月1日～2025年2月28日
(2) プロジェクトの目的
本プロジェクトの目的は美浜町における全天候型あそび場施設の計画案を作成するために行うことである。美浜町では子育て世代のあそび場に対するニーズに応えるため町内にこどものあそび場を整備することを検討している。そのあそび場施設を整備する上で、施設に備えるべき機能、設計の前提となる整備方針や諸条件の整理が必要である。計画案の作成を行うことで、それらの整理の支援を行った。
(3) プロジェクトの実施内容
ワークショップの準備、調査期間（6月～9月） 研究室であそび場のプロジェクトチームを立ち上げ、以下の活動を行った。 <ul style="list-style-type: none">・「美浜町子どもの遊び場整備事業基本計画」の読み込み・全天候型あそび場整備の事例の収集・はあとぴあ内でのあそび場のデザイン案の検討、模型の作成・ワークショップの企画 さらに並行して坂井市で計画中の全天候型あそび場整備のワークショップにも参加してワークショップの運営や意見のとりまとめ、ニュースレターの作成を学んだ。

あそび場のデザイン案ではプロジェクトチームで意見を出し合い、大枠となるコンセプトを決めて、チーム全体や町職員と共有した。

(コンセプト)

- ① みんなが楽しめる居心地の良い空間
 - ・子どもだけでなく、おとなや高齢者などみんなが楽しむことができる空間
- ② 「自由」と「学び」があるあそび場
 - ・あそび方は子どもたち自身で決める
 - ・あそびの選択肢、バリエーションが多いあそび場
 - ・あそび場を通して、子どもたちが身体的に学ぶことのできるあそび場
- ③ 美浜らしさのあるあそび場
 - ・美浜の地域特性のある素材やものが使われたあそび場
 - ・あそび場を通して美浜らしさを体感できるようなあそび場

このコンセプトを元にワークショップに向けてデザイン案を2つ作成した(図1)。

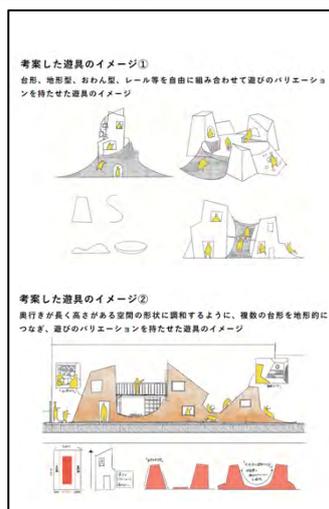


図1 初期デザイン案

まちづくり推進課	主事
教育総務課	主事
生涯学習推進課	主事
健康福祉課	主事
子ども未来課	管理栄養士
子ども・子育てサポートセンター	主任保健師
	保健師
社会福祉協議会	リーダー

図2 参加者の所属先一覧

ワークショップ(1回目)(10月)

10月8日(火)に第01回目のワークショップを開催した。参加メンバーは8人でいずれも子育て世帯の町職員である(図2)。グループワークは2つ行った(図3)。

1つ目は、はあとびあの現況の使われ方を全員で共有した。意見の中では特に高齢者が現在利用していることが多いことから、高齢者の利用(定期健康診断など)を阻害しないようにあそび場を整備することが求められた。

2つ目は提案したあそび場に対して意見を出してもらった。走り回れる場所や遊具に登るバリエーションを増やすという要望があった。また大きい子と小さい子のエリア分けや管理者からの死角を無くすという安全対策も求められた。



図3 ワークショップの様子

ワークショップ(2回目)(11月)

1回目から約1ヶ月後の11月11日(月)に2回目のワークショップを行った。参加メンバーは前回と同じメンバーであり、A班、B班の2班で構成した。あそび場のデザイン案は前回での意見を元にブラッシュアップして、「遊具案を2つ」「広場案」の3つを提示した(図4、5)。その2つの案に対して、前半はA班が「遊具案(2つ)」、B班が「広場案」に対して意見を出し合い、後半には案を入れ替えてワークを続けた。

最後にはどちらかの案を採用するかを話し合い、「広場案」を進めていくことになった。



図4 遊具案(2つ)



図5 広場案

ワークショップ後（12～2月）

ワークショップが終わってからは健康診断の利用の仕方についてのヒアリングの実施、設計事務所の設計者を交えた定期的な打ち合わせを行い、基本計画を進めてきた。12月、1月と定期報告として美浜町と打ち合わせを行い、美浜町の次年度の予算を申請するための資料を作成した。1月での美浜町の打ち合わせでも検討事項が挙がっているため、それらを解消するための検討を引き続き行っている（参考資料1）。また、これまでの経緯は日本建築学会の大会で発表するために論文としてまとめている状況である（4月2日に原稿を提出）（参考資料2）。

（4）得られた成果

① はあとびあでのあそび場整備の必要条件と課題の整理

ワークショップや職員へのヒアリングを通してはあとびあ内であそび場を整備する際の条件と課題の整理を行い、今後の方針を固めることができた（図6）。もともと高齢者のための施設として利用されていることから、「高齢者も楽しめるあそび場」を整備することを想定している。あそび場は平日のこどもの利用は少ないため、その間は高齢者が過ごせる場として計画する。

② あそび場の基本計画

「広場案」をより発展させた2つの案を美浜町に提出した（図7、8）。その案でこども未来課の担当者から議会での予算申請のための町長へのプレゼンを行ってもらった。現在はこの2案を一つにまとめていくための検討を行っている。

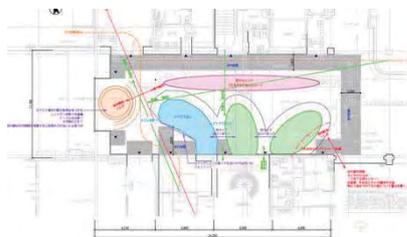


図6 あそび場のゾーニング



図7 広場案を発展させた案A

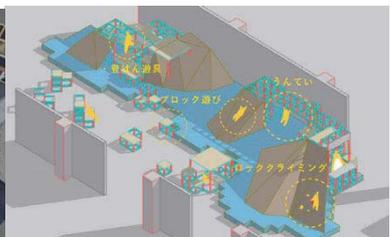


図8 広場案を発展させた案A

（5）今後の展開 ※支援対象プロジェクトの区分が（1）または（2）の場合は、共同研究等への展望について詳細に記載ください。

A：あそび場整備の予算の確保

美浜町の2025年度の予算として3,000万円ほどのあそび場整備のための金額を申請している。

B：美浜町との共同研究等の展望

このあそび場整備以外にも美浜町全体のあそび環境の整備に関わっており、このプロジェクトが終了してからも、あそび環境づくりや使われ方の継続研究を実施できる可能性はある。

2025/1/7美浜町報告会

町長からの要望

- ・ 高齢者の動線
- ・ 避難所の時の対応
- ・ 検診の対応
- ・ 管理方法

土日は一人の日直さんで見ると

基本は保護者に見ていただく

グリッドとは？

- ・ 一つのグリッドシステムの重さは？

→ 小学校の椅子ぐらいの重さ

ウレタンマットは固定？

カフェの考え方、固定か

- ・ 遊具とカフェが合体している形は、きてくれているボランティアさんが動きにくいだろう。
- ・ 分離してくれた方が動きやすい
- ・ 水曜と土曜がカフェ、10-15時
- ・ 遊具は常設、いつでも遊べる
- ・ 椅子や丸テーブルでお弁当を食べたりすることがあるので、飲食ができるスペースと遊具スペースは分けて欲しい。
- ・ コーヒーを淹れるところとかで、子供が遊んだりしているのはどうなのか（デザインとしてはいいが）
- ・ ゆっくりするというイメージでは、グリッドのテーブルに座っているパースのイメージ
- ・ カフェと遊具を完全に分離してしまうと予算の枠として、辻褄は合うのか
- ・ 遊具の背景にカフェがあるという方が設計の依頼としては合っているのかもしれない
- ・ ボランティアの方は、常設のカフェをそもそも望んでいるのか → 多分望んでいない
- ・ あくまでハートピアの活性化の活動の一環であって、カフェがしたくてしているというわけではないと思われる
- ・ 考え方として、カフェが遊具の中にあるとこの遊び場、ハートピアのこれからの展開を望めるのではないかと思っている（事業展開として）
- ・ 左側のスペースがあるから今までの活動はその場所のできるけど、遊具があることで活動が広がるかもしれないというスタンス
- ・ 親も登れるという想定

注意事項等としてどんなものがあるか

ジャングルジムとかうんていは美浜町の中でもないから大事にしてほしい

ウレタンマットで高齢者がつまづくということはないか

大きさが想定がつきにくいので、1/1で作ってみて検討してみるのがいいかも

事務所からの見晴らしが足りていないのではないか

誰がどれだけ出入りしているかわかるように、事務所からの視線は確保してほしい

検診に案内人がいなくてもそこへ向かっていけるような動線はあったほうがいいのではないか（矢印とか？）

靴下とかで遊んでも大丈夫か

新しい本を置くというのはやめた方がよさそう

管理できるなら置けるかも

静と動の動きで分けても良さそう

斜面での遊びはロープなどの要素によって変化させることができるのではないか

それによって遊ぶ年齢を変えることができるのではないか

美浜町さん 高齢者の健康器具としても使えるのではないか

（ウレタンマット含め高齢者の利用の方が日常として想定されている？）

→高齢者がどう使うのかという視点からの設計も必要？

スケジュールとしては2月から現状案をブラッシュアップ

基本計画の検討が年内

4月から実施設計

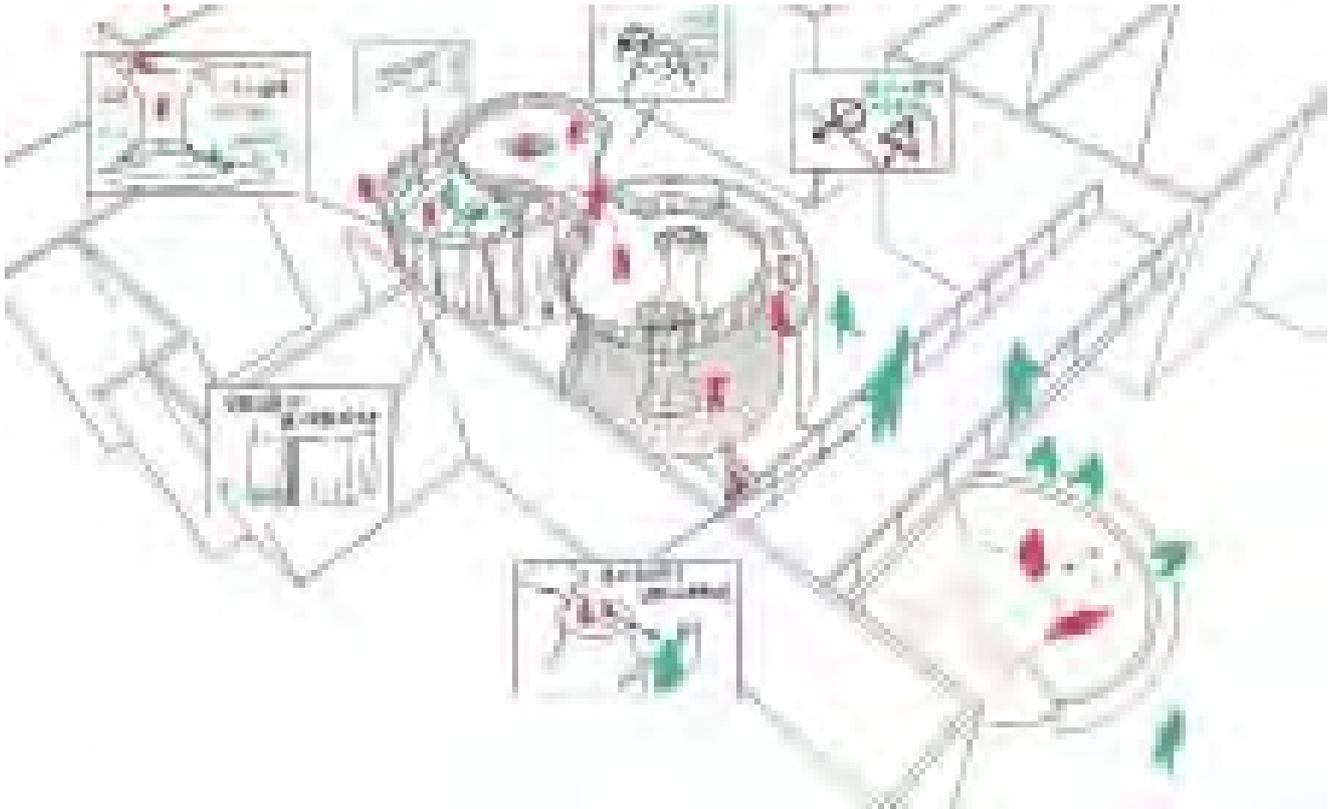
そこにいくまでの案を固めるのが2月3月

業者選定が8月9月

来年度に施工

カフェのボランティアさんの意見のフィードバックによってまたブラッシュアップを検討

健康診断、避難所、管理運営を確認



2.1 円型を中心とした空間造り

2.2 案の概要

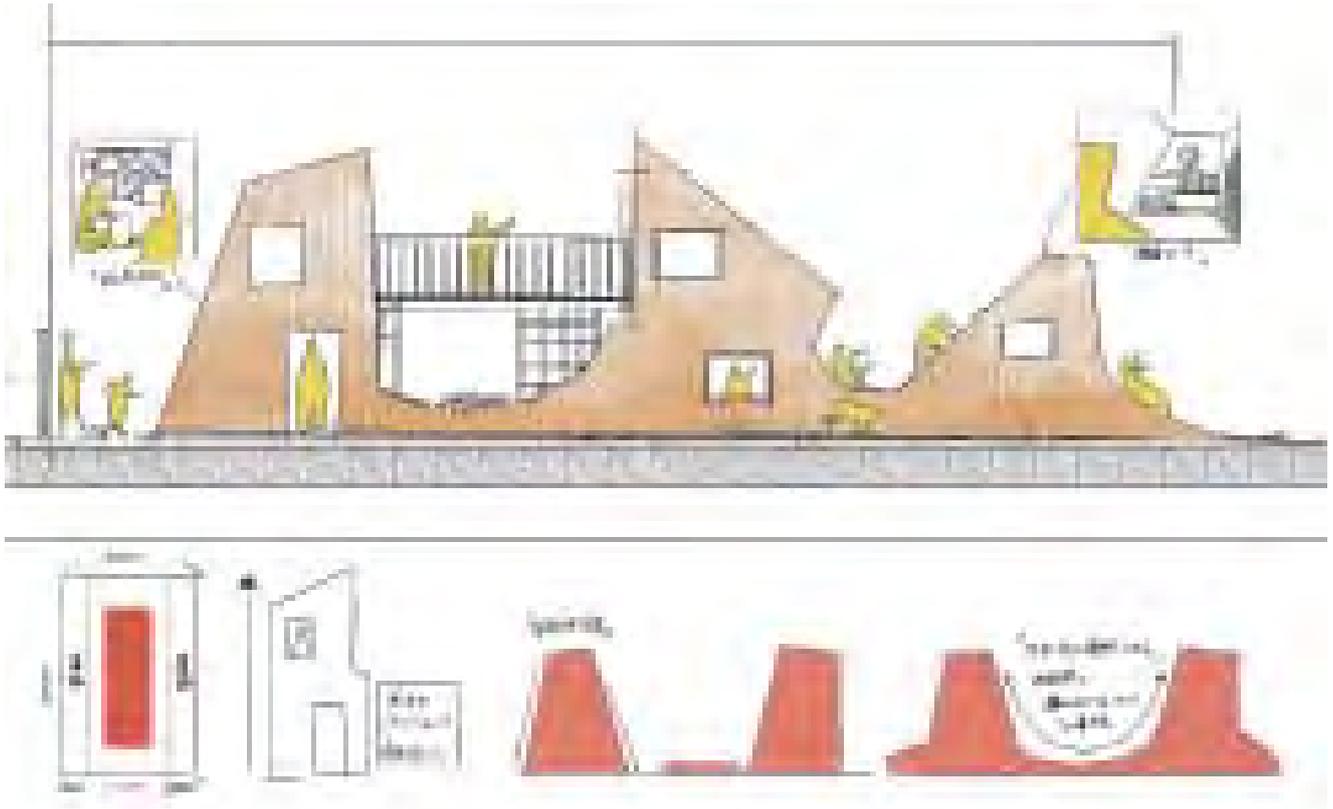
ホール空間という設計場所の性質を鑑みて、左右通路幅 2.0m を確保しつつ、遊びの場を中心に限定する地形のような形状の遊具。

床に固定できない条件から、各遊具を繋ぎ、重量によってバランスを取る。地形のようにすることで、遊びを連続的にし、子供たちの遊びが限定されないように設計している。想定される遊び方としては、滑る、つかむ、屈む、等。外周部は動的な遊び場として、内部空間は、絵本コーナーやおもちゃスペースとすることで、静的な遊びの場として、遊び方のゾーニングを行っている。遊具にいくつか開口を設けることで、ホール側の人ともコミュニケーションを取ることができるようになる。内部空間をイベント利用などにも活用できれば遊び以外の用途も考えられる。

2.3 案の変遷



話し合い (1) の中で学生内から出た、「台形」「レール」「ネット」「地形」の4つを設、ホ用者の双方が交錯しないように、遊びの場を遊具でゾーニングをすることである。



1.1 地形のような箱型遊具

1.2 案の概要

ホール空間という設計場所の性質を鑑みて、左右通路幅2.0mを確保しつつ、遊びの場を中心に限定する地形のような形状の遊具。

床に固定できない条件から、各遊具を繋ぎ、重量によってバランスを取る。地形のようにすることで、遊びを連続的にし、子供たちの遊びが限定されないように設計している。想定される遊び方としては、滑る、つかむ、屈む、等。外周部は動的な遊び場として、内部空間は、絵本コーナーやおもちゃスペースとすることで、静的な遊びの場として、遊び方のゾーニングを行っている。遊具にいくつか開口を設けることで、ホール側の人ともコミュニケーションを取ることができるようになる。内部空間をイベント利用などにも活用できれば遊び以外の用途も考えられる。

1.3 案の変遷



話し合い(1)の中で学生内から出た、「台形」「レール」「ネット」「地形」の4つを設計におけるテーマとし、各組み合わせを変更しながら4案を設計した。設計の主題としては、ホールに対しての設計であり、高齢者の利用が多いことから高齢者の利用者と、子供の利用者の双方が交錯しないように、遊びの場を遊具でゾーニングをすることである。

事業完了報告書

嶺南地域共創センター長 殿

研究担当教員等（代表者）

所 属 学術研究院工学系部門

氏 名 川本 義海

下記のとおり令和7年2月28日をもってプロジェクト研究が完了しましたので報告します。

<p>プロジェクト名</p>	<p>令和6年度福井県嶺南地域における課題解決事業・プロジェクト 「高齢社会における地域の暮らしの安心を支える小浜市地域公共交通システムの構築」</p>
<p>事業成果の概要</p>	<p>【プロジェクトの目的】 車（マイカー）志向が高く、公共交通の利用者は年々減少している小浜市を対象に、高齢社会における地域の暮らしの安心を支える地域公共交通システムの構築をめざす。</p> <p>【プロジェクトの実施内容】 小浜市では「小浜市地域公共交通計画」（5か年計画）を令和4年6月に策定し、地域の実情に合った公共交通ネットワークの効率的な確保や日々のお出かけを支える公共交通手段の提供の実現をめざしている。令和4年度にはデマンド交通および市街地循環バスの実証実験を行い、コミュニティバスの運行形態の見直しに着手すべく、令和5年度にはその検証とあらたな交通体系を模索すべく地区住民および交通事業者との意見交換を福井大学川本研究室と共同で令和6年度も引き続き実施してきた。</p> <p>また中でも高齢者の通院、買い物といった日常生活に不可欠な移動の確保を望む声は大きいことから、これまでの運転免許返納者を対象とした現在のモビリティの現状を今回初めて把握し、今後の支援策を検討する基礎的資料を得ることとした。具体的には同市総務部生活安全課および企画部新幹線交通まちづくり課の協力を得て、過去5年間に免許返納した小浜市民500人にアンケートを郵送配布・回収をおこなった。</p> <p>【得られた成果】 令和6年度も引き続き、新たな交通体系を模索すべく上記関係者へのヒアリングと調整を進めてきたが、地域住民主体の交通確保の十分な機運醸成とそれに根差した具体的な動きづくりには至らなかった。一方で、今回初めて大規模に実施した免許返納者へのアンケートは予想を大きく上回る回答率（6割超）となり、とくに高齢者の関心の高さと問題の大きさを再確認することとなった。さらにこれまで実態として明らかにできていなかった免許返納後の生活の質の変化、また免許返納前の支援の在り方に示唆を与える貴重な情報を得ることができた。</p> <p>【今後の展開】 この分析結果については、研究代表者が会長を務める小浜市地域公共交通会議で報告する（3/27）とともに、同市関係部署と情報共有しながら次年度以降の福祉施策も含めた総合的な交通政策として実施予定の実証実験に反映していく。</p>

敦賀「情報プラットフォーム」づくり
嘉瀬井恵子（地域創生推進本部）

1. はじめに；プロジェクト研究の目的

令和6年3月16日の北陸新幹線敦賀開業を控え、現在、敦賀駅は広域交通の要衝として、また、北陸新幹線終着駅として一つの大きな節目を迎えている。特に、敦賀駅西地区は2022年9月に複合棟、駅西広場公園、ホテルの供用を開始して以降、産官学による共創のまちづくりへの注目は高い。そこで、現代社会に生起する一つの総体的な文化現象としての「まちづくり」から、新しい<敦賀>を織り合わせ、学際的な視座で捉える「情報プラットフォーム」を作ることを目的としてプロジェクト研究を進めた。

2. 2024年度のプロジェクト研究の概要

本プロジェクト発足当初は、教育として、工学部と嶺南地域共創センターの共創による学部演習の実施、研究として、敦賀駅周辺の整備にかかる研究・調査についてのreview（評価）や発信をする計画であった。但し、発足後、本学の多職種連携教育の推進に取り組む方向となり、その一環で、後者の研究については一部、内容を変更し、主に次の2点に取り組んだ。

2-1. 教育；工学部と嶺南地域共創センターの共創による学部演習の実施

教育の側面では、工学部前期授業「都市設計演習」と本プロジェクトとを連動させ、学生に対し、主体的に地域の現状や、発展の状況を習得させることを狙いとした。

3回にわたる敦賀でのまちづくり演習によって、港に面したまちづくり、高齢化が進む団地周辺地域、廃校小学校の活用、商店街の活性化といった、若者層からみた「まちづくり論の活況と課題」を見出すことができた。

2-2. 研究：知的情報インフラ

当初、敦賀駅周辺の整備にかかる研究・調査についての評価や発信をする計画であったが、多職種連携教育の推進の一環で予算を修正したため「情報」の部分を持する形で、「知的情報インフラとしてのまちづくり」の知見収集に計画を変更した。この目的のため、先行事例調査として

「本のまち八戸」を掲げ、2016年12月にオープンした八戸ブックセンターを視察した。



図1 八戸ブックセンターへの先行事例調査

八戸市内の民間書店数は10年余りで3、4店は減り、現在は9店舗である。そのため、八戸ブックセンターでは売れる本は民間の書店に任せ、あえて売れにくい本を販売することを念頭においている。この点で、敦賀市のちえなみきとの共通点が見いだせる。敦賀駅前に立地するちえなみきも、商店街の老舗書店、千田書店等を含む活性化を目指している。この点で、まちづくり構想にあたって、八戸市全体で一つの大きな書店になることを目指している八戸ブックセンターに学ぶ点は多い。書店を知的情

報インフラだと捉えれば、書店の消滅は大型書店がある大都市と地方都市の文化的環境の格差を大きく広げることとなる。その場で読む、借りる機能としての図書館のみならず、本を買って所有する喜びを得ることこそその知的情報インフラの効果を、次世代を担う学生が地域（ちえなみき）で学び、研究する道筋作りが喫緊の課題であると考える。

3. 情報プラットフォーム

3-1. 「情報」を介した、地域との連携

本活動では、特に建築を学ぶ工学部生が、地域を知り、多様なステークホルダーと繋がるとともに、知を探究し、創造し、未来に向けてまちをデザインすることを狙いとしました。この目的のため、敦賀市まちづくり観光部に助言協力を頂く体制とした。

嶺北の学生が効率的に学べるよう、シェアサイクルの活用での地域見学を検討した。新幹線駅となった敦賀市においてシェアサイクルの活用がまちや観光に与える影響、シェアサイクルの導入の経緯を、敦賀市の担当者から話を聞き、学生に考え、まちづくりデザインに活かす機会を作った。なお、知的情報インフラとしてのまちづくりの講義も検討したが、担当市役所職員との日程の調整がつかず、今回は見送らざるを得なかったが、資料として学生に配布し、まちづくりの一助となるようにした。

3-2. 多職種連携教育の推進

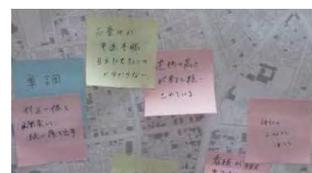
今回の活動では、通学している文京キャンパス（福井市）を離れ、他学部の学生同士が敦賀の文化や歴史に触れながら視野を広げることを目的に、工学部生25名と国際地域学部生2名との多職種連携教育を実装した。

午前中の授業を受講した後、電車で1時間以上かけて、今春、新たに新幹線駅となった敦賀市内5か所（新津内市営住宅周辺、氣比神宮、敦賀市立北小学校周辺、敦賀港・博物館通り、商店街沿道地区、市立図書館及びその周辺）を調査した。このような取り組みは、学生にとって「学びの場の拡充」という意味だけではなく、「あえて時間をかけて地域に入る＝実体を捉える」意味において、大きな意義を持ったと感じる。また、2学の学生が混成で調査したことは、普段、学科の専門性に応じた授業を受講している学生も、学年や学部を越えた学びの中で、刺激を受けつつ、専門性を多角的に深くアプローチをしていくきっかけとなったようだ。この実装については、レターとして嶺南地域共創センターのホームページに掲載している。

但し、多職種連携教育の推進については、中期計画のカウントとしては計上しないことで地域連携推進課の坂井課長に複数回申し出ている。理由としては、実装にあたっての実施体制がなかったこと（旗振り役が分からないままで関係教員間に混乱をきたし



図2 「多職種連携教育の推進」レター



た)、その結果、関係教員の授業内容に変更が生じたこと。検証(多職種連携教育の推進の課題、工夫等の振り返り)が現在に至るまでなされていないこと等もあり、多職種連携教育の紐づけ先の関係教員からの「カウントをせず、検証時期にしたい」との申し出を尊重し、カウントはせずに今年度は、試し実施段階として認識して頂きたい。

5. まとめ 成果として

本プロジェクト研究は「まちをどのように価値づけ、客体化していくのか」といった地域社会のリアリティの探究でもあり、地域の自律的な発展の在り方の模索や、地域アイデンティティの形成にもつながるものである。特に、嶺北のメインキャンパスの学生が、嶺南敦賀市で、「共創による新しい価値」の創造が実装できたことは、嶺南地域共創センターとしての役割をも担えたものとする。

本プロジェクトは、嶺南地域共創センター支援によって、実装することが出来ました。厚く御礼を申し上げます。

嶺南地域・子どもヘルスリテラシー向上プロジェクト

嘉瀬井恵子（地域創生推進本部）

1. はじめに；プロジェクト研究の目的

花粉症の症状の悪化によって生活の質の低下や、長引く症状による治療費等の負担（金銭的、精神的）は社会問題となっている。このような課題に対し、本プロジェクトは、主に児童・生徒らを対象として、大学を持つ医学的知見（ヘルスリテラシーのインプット）と、本から得られる情報（情報リテラシーからのアウトプット）の両側面の知見や機能、特質を効果的につなぐことで、受け身に留まらない、子どもの自律的なヘルスリテラシー学習を能動的に創発させることを目的とした。

2. 2024年度のプロジェクト研究の実施概要

本プロジェクトでは、個人の生命や生活の質（QOL）の維持・向上に「ヘルスリテラシー」の習得は重要な要素であるものの、日々の営みの中で習得していくことは容易でないため、小学校と連携し、学びを深化させることを目指すものである。小学生に対して、花粉症罹患・重症化予防策としての「マスク生活の習慣化」を学校の保健教育において普及させることを最終的なゴールとしている。他方、マスクの着用については、自身の健康を決める意思決定力との関係性が強いことから、まずは、令和6年度においては、最終ゴールへの下地として、花粉症罹患率が高く、同時に、発症予防として適齢である小学生（小学生低学年層を対象とする場合には、その保護者）らを対象に、ヘルスリテラシーを身に着ける（あるいは高める）機会を設ける機会を立案した。花粉症の罹患予防、重症化予防を促すことで、地域や社会全体の医療問題の解決に対しても積極的に接近していく。

3. 計画の変更（予算の廃止）について

本プロジェクトでは、敦賀市内の小学校と連携を進めていたが、当初、依頼していた敦賀市内の対象小学校長から「県の別の事業（歯科）の取組みを実施する対象校となった。タイミングが合えば実施可能」とのことであったが、調整に時間を要することが判明し、花粉症予防の季節（2月～3月）を前に計画変更することを選択した。

但し、花粉症予防の効果についてはヘルスリテラシーの重要性を記載したオリジナル冊子を作成し、美浜町全小学校校長、敦賀市内の3校の小学校、若狭町、おおい町の各役場に配布した。

5. まとめ 成果として

本プロジェクトは、嶺南地域共創センター支援によって、実装することが出来ました。厚く御礼を申し上げます。

小浜市における「食縁」の変容がもたらす地域課題の分析と その解決に向けた提案

(令和6年4月-2月実施)

地域創生推進本部
附属創生人材センター
特命助教 石原周太郎

1. プロジェクトの目的

本事業は小浜市を対象に、「食」にまつわるつながりの現状を把握するとともに、その地域課題の解決に向けた提案を行うことを目的とする。

2. プロジェクトの実施内容

本プロジェクトは大きく分けて3つの調査を行った。

1つ目はヒアリング調査で、小浜市役所里山里海課、小浜市観光協会、若狭フィッシャーマンズ・ワーフという「食」に関する主要なステークホルダーに対して行ったのと同時に、適宜1次生産者や観光客、地域住民にも調査を行った。

2つ目は夏季(9月8日)と冬季(1月4日)に若狭フィッシャーマンズ・ワーフと道の駅若狭おばまにおいて小浜市の食に関する満足度のアンケート調査を行った。このアンケート結果は共分散構造分析による解析を行った。

3つ目は青山学院大学に赴き、学生に対するアイデアソンの実施および関東学生の小浜や嶺南に対する意識調査を行った。

3. 得られた成果

食に関するステークホルダーへのヒアリング調査では①市が県や漁協などと協定を結びながら養殖の推進、ブランディングを進めている。②5-60代への観光客はリピーターが多く、2-30代に

するアプローチが少ない。③水産業、特に牡蠣の生産者は減少の一途であり、牡蠣殻の2次利用などは進んでいないことなどが明らかとなった。

アンケートの結果では、夏冬ともに地域資源とくに「食のクオリティ」に関する満足度が高いことが示された。一方で、夏の観光客は「アクセスの良さ」からくる「食のクオリティ」が負の値となり、小浜市の満足度に悪影響を与えている。また、冬の帰省客においては「アクセスの良さ」よりも「情報発信力」からくる「認知度」が満足度に悪影響を与えていることから、来訪者の属性に起因する傾向の違いが明らかとなった。

青山学院大学の学生からは、小浜市の魅力は伝わったものの、アクセス面での時間的・金銭的懸念を持っていることが明らかとなった。

4. 今後の展開

得られた成果を踏まえ、高付加価値のある体験型の観光資源開発を提案した。さらに付加価値を高めるため、今後は牡蠣殻の2次利用をはじめとした廃食材の活用を目指した取り組みを行う予定である。

※ 本事業で行ったアンケートについて高度な統計分析を処理するのに必要だったため、予算には計上していないPCの購入を行った。

わかさ健活プロジェクト事業報告書

標記の件について、下記の通り報告いたします。

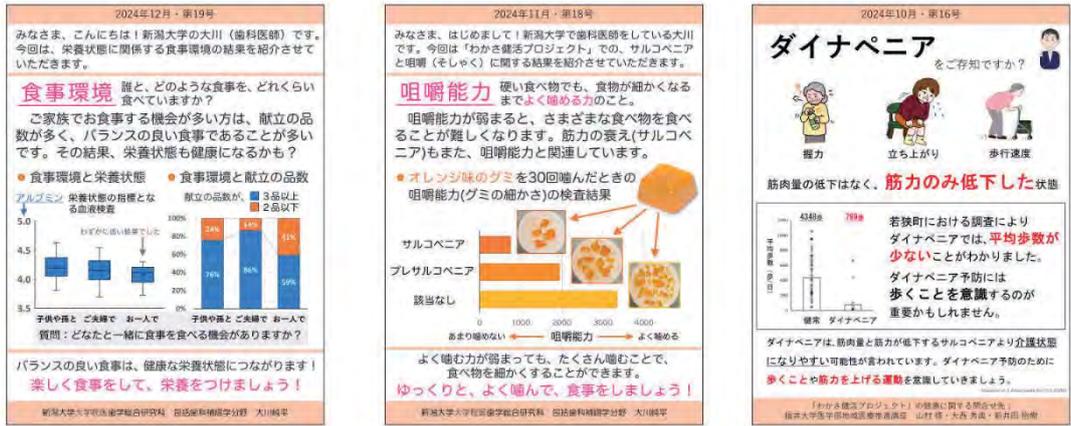
記

事業名称	わかさ健活プロジェクト
期 間	令和6年4月1日～令和7年2月28日
場 所	若狭町瓜生（下夕中ふれあいセンター、下吉田ふれあい会館、瓜生公民館）
目 的	若狭町瓜生地区で高齢者を対象としたフレイル・サルコペニア検診とそれに基づく運動・栄養指導を実施し、介入高齢者における要介護者の増加抑制を図る。
内 容	①フレイル・サルコペニア検診を年2回実施 ②健活ニュース発行 ③IoTミラー機器の効果検証
	<p>① フレイル・サルコペニア検診を年2回実施</p> <p>検診の実施は、2024年6月22-23日103名、2024年12月7-8日：71名の地域在住高齢者に検診ができた。2024年6月の検診では学内医療・事務スタッフ17名、学外16名、学内学生20名、仁愛大学学生4名の参加、2024年12月の検診では学内医療・事務スタッフ15名、学外17名、学内学生17名、仁愛大学学生6名、新潟大学歯学部大学院生の参加があり、地域をフィールドに多職種連携教育（IPE）が実践できた（図1.）。</p> <div data-bbox="293 1339 1410 1962" style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p style="text-align: center;">図1.検診風景</p> <p style="text-align: center;">新潟大学 歯学部による 口腔チェック</p> </div>

② 健活ニュース発行

月1度の健活ニュース発行し、検診で得られた結果を若狭町瓜生地区に配布した。検診に参加されていない住民にも検診で得られた解析結果を周知することで、住民の健康意識を高めた。特徴的な報告は、新潟大学歯学部との共同研究で実施されている口腔検査の結果を健活ニュースで一早く報告している。福井県内には歯学部の大学がないため、口腔ケアへの認識が低い。また、虫歯の保有率において福井県は全国ワースト5位にもなっている。当講座との共同研究の結果は福井県内にとっても重要な結果となっている。

図2.健活ニュースで研究報告



新潟大学歯学部との共同研究による
検診結果を報告

健活ニュースにて
検診結果を報告

③ IoTミラー機器の効果検証

令和6年3月から6月までに開発したアプリを搭載したIoTミラー機器を若狭町在住の高齢者に配布し、健康実態を調査する実装実験を開始した。IoTミラー機器は、エクササイズ動画の閲覧ができる健康アプリを搭載した機器である。また、撮影した食事内容を管理栄養士と共有することで、自宅に居ながら個別の栄養指導を手軽に受けることが可能である。効果検証では、サルコペニアの重要な骨格筋指数の増加を認めた。現在、効果検証については国際誌に論文を投稿している。

今後も、得られたデータを論文化や地域の政策に活かせる資料の作成を行う。

<学会発表>

1. Relationship between masticatory function, nutritional status, and sarcopenia in community-dwelling older people. 日本咀嚼学会 第35回学術大会. 2024年9月14日
2. 地域在住高齢者の血清アルブミン値とサルコペニアとの関連—5カ月後の比較—. 第44回日本看護科学学会学術集会. 2024年12月8日

<論文>

1. 地域高齢者のダイナペニアにおける1日の平均歩数の関連. 福井大学医学部研究雑誌 早期公開2024年10月
2. 身体能力に応じた個別化運動プログラムアプリの開発と利用評価. 日本予防理学療法学会雑誌 早期公開2024年12月

<プレスリリース・報道>

福井大学ニュース

	<p>1. 「わかさ健活プロジェクト」 若狭町の高齢者にIoTミラー機器を配布し、高齢者の健康実態の調査開始. 福井放送. 2024年4月1日</p> <p>2. 第7回日本オープンイノベーション大賞を受賞. 2025年2月12日 報道</p> <p>1. 若狭町で実証実験 ICTで予防医療. 福井放送. 2024年6月25日 <受賞歴> 第7回日本オープンイノベーション大賞 選考委員会特別賞（アフラック、アフラックデジタルサービスとの共同研究にて）</p>
<p>次年度の 展開</p>	<p>本講座はサルコペニア予防に着目した検診を2019年から5年間実施している。これまでに延べ800名が参加し、サルコペニアやフレイル予防の意義が周知されているが、他地域や若年層への教育の必要性が課題である。また、若狭町福祉課も健康寿命延伸のためフレイル予防に取り組んでいるが、地域で重要な役割を担う「フレイルサポーター」の減少が課題となっている。フレイルサポーターは住民の健康維持を支える存在であり、その活動の維持・拡充が地域福祉・医療の発展に不可欠である。そこで、住民（若年層を含む）が気軽に参加できるイベントを企画し、フレイルサポーターの活動や意義を広く伝えることで、地域全体で課題に取り組み、支え合いの輪を広げ、健康で明るい未来を共創することを目指す。</p>

小浜みらいGO膳プロジェクト事業報告書

標記の件について、下記の通り報告いたします。

記

事業名称	小浜みらいGO膳プロジェクト
期 間	令和6年4月1日～3月31日
場 所	福井県小浜市 障害者就労継続支援施設（社会福祉法人つみきハウス）、個人宅
目 的	①個別加熱調理システムの導入による栄養状態の改善効果判定。 ②宅配事業への実証
内 容	<p>①栄養評価の検診を1回実施（2024年9月）、2025年3月実施予定</p> <p>検診の実施は、2024年9月7日名に検診ができた。また、2025年3月1日に検診を実施予定である。2024年9月の検診では学内医療・事務スタッフ10名、学外名、学内学生3名の参加があり、地域をフィールドに多職種連携教育（IPE）が実践できた（図1.）。</p> <div data-bbox="352 1144 1453 1966" style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p style="text-align: center;">図1 定期健診（＝実践型多職種連携教育）</p> <p style="text-align: center;">他に診療放射線技師、理学療法士、作業療法士、管理栄養士が参加</p> </div> <p>個別調理システムを利用することにより、血液データでLDLコレステロール、HbA1cなどの低下、血清亜鉛の増加が確認された。また、体組成計による位相差（栄養関連指標）</p>

が改善した。本システムの利用は、生活習慣病やサルコペニアにも効果がある可能性を示唆した。本研究の成果が国際誌に掲載され、広く発信されることとなりました。これにより、小浜市における個別調理システムの取り組みが国内外へと周知される一歩となった。

②宅配事業への実証

本研究では、個別調理システムのさらなる実用性を検証するため、5名の個人宅において宅配事業の実証をスタートした。これにより、日常生活の中での継続利用が健康指標に与える影響を評価し、生活習慣病予防やサルコペニア対策としての有効性を明らかにすることを旨とする。

<シンポジウム>

1. 令和6年度 福井大学地域創生推進本部 附属創生人材センター・附属嶺南地域共創センター 共催シンポジウムの. 2025年1月21日

<論文>

1. Individualized Nutritional Management Using Dishcook Improves Nutrition Status Markers in Patients with Intellectual Disability. Journal of Nutritional Science and Vitaminology 70(4) 352-358 2024年8月

<プレスリリース・報道>

報道

1. 高齢者にIH調理器使いできたての食事提供 小浜市で実証実験. NHK福井放送. 2025年1月27日

2. 新しい配食サービス 専用のIH調理器で出来立てを フレイル予防の効果検証 福井大学医学部など実証実験. 福井放送. 2025年1月28日

新聞

3. IH調理器で手軽に出来たて 栄養食宅配 高齢者健康に 小浜で福井大など実証実験. 日刊県民福井. 2025年1月30日

4. 高齢者宅にIH調理栄養食 小浜で実証実験、5人に3ヶ月配達 介護予防や健康寿命延伸へ 福井大が健康チェック. 中日新聞. 2025年1月30日

次年度の 展開	次年度は、小浜市の配食産業に参入を目指し、個人宅へ参加者を増やして地域高齢者の健康と見守りの推進と杉田玄白記念公立小浜病院、アクール若狭(介護老人保健施設)に個別調理システムの導入を目指す。栄養士が所属していない施設での食事療法を継続、食事療法を必要とする患者のみならず独居高齢者への食事提供にも活用することで地域住民の栄養バランスが改善し、個別調理システム導入により健康寿命の延伸や再入院患者の減少を目標とする。
------------	---

- ・プロジェクトの名称、代表者

福井梅の収量向上のためのドローンを用いた画像・点群処理に基づくIoT技術の導入、築地原里樹

- ・実施期間

2024年5月1日から2025年2月28日

- ・プロジェクトの目的

農林水産省の統計によると福井県の梅の単位面積あたりの収量が他県に比べ相対的に少ない傾向があり、その原因特定と就農人口減に備えた農業従事者間の技術伝承が必要となる。本研究ではドローンの空撮画像や構築する三次元モデルを梅の生産活動に導入し福井県の梅の収穫量向上を目指す。

- ・プロジェクトの実施内容

本研究では、ドローン画像を基にウメの樹を対象にウメの樹の三次元点群データを作成する。点群解析と骨格化アルゴリズムを用いてウメの樹のスケルトン、トポロジーを抽出し、木グラフを作成する。点群データと木グラフを用いて枝の経路数、本数、合計長さや平均半径を計算し、収量との相関を評価する。

- ・得られた成果

ドローン画像を用いた点群データから骨格化を用いて作成した木グラフを使用して樹情報を抽出し、重回帰分析、ウメ収量との相関評価を通して収量予測の可能性を調査した。結果として、合計長さと収量との相関が相関係数が0.615、p値が0.004と正の相関が確認された。

- ・今後の展開（事業の継続が見込まれている場合）

今後は、ドローンの撮影を画像ではなく動画で行うことで点群作成の際の入力画像枚数を増やし、密なウメの樹の点群データを作成し、トポロジーの精度を向上させる。



(a) 点群データと骨格化結果（青点：骨格，黒線：トポロジー）



(b) 骨格グラフ



(c) トポロジーグラフ

「令和6年度福井県嶺南地域における課題解決事業・プロジェクトに対する支援」の報告書

報告者: 国際地域学部 小幡浩司

2025年3月13日(木)

1. 事業名称: 鉄道と海運の町・敦賀から発信する人権啓発事業
2. 事業目的: 人権啓発を通して、地域住民の人権意識を高め、多文化共生のまちづくり、
ならびに、地域の活性化に貢献する。

3. 活動内容:

1) 人道の港 敦賀ムゼウムでのキャリア教育実習

令和6年度前期と後期に国際地域学部生3名がキャリア教育実習生として人道の港敦賀ムゼウムで人権啓発活動を行った。具体的には、敦賀ムゼウム常設展ガイド(海運と鉄道のみち・敦賀の発展の歴史、ポーランド孤児上陸、ユダヤ難民上陸)を通して、日本のグローバル化の玄関口である敦賀でこそ起こり得た人道の歴史を県内外の来場者に伝えた。さらに、敦賀ムゼウムで行われた各種イベントの運営補助(「シベリア孤児子孫及び関係者との交流プログラム」や「ブリッジプロジェクト」など)を通して、市民、特に子どもたちが異文化との交流を楽しみながら多様な文化を理解する機会を創出した。活動詳細は以下の通りである。

(2024年度前期)

日時	場所	実習・活動内容
5月11日(土) 9:30-15:00	敦賀ムゼウム	・オリエンテーション ・西川館長による講義(設立の背景、歴史、ミッション、現状と課題等)、及び質疑応答 ・敦賀高等学校創生部によるガイド研修の見学・館内見学(常設展・企画展)、及び自主研修
6月1日(土) 13:00-18:00	敦賀ムゼウム	・シベリア孤児子孫及び関係者受入れに係る館内外ガイド・交流プログラム補助作業 (イベント準備・打合せ、館内ガイドツアー準備、記録・写真撮影、合唱団との交流記録等)
6月29日(土) 10:30-17:00	敦賀ムゼウム 敦賀鉄道資料館 敦賀市立博物館	・敦賀フィールドワーク:館内ガイドを充実化させるためにユダヤ難民のエピソードが語られている敦賀ムゼウムの周辺地域を巡り情報収集を行った(ユダヤ難民上陸地、赤レンガ倉庫(リングの少年)、朝日湯跡、渡辺時計店跡、敦賀鉄道資料館、敦賀市立博物館など)。学生独自の企画である。
6月30日(日) 9:30-15:00	敦賀ムゼウム	・館内ガイド研修(7月6日のスタディツアーに向けて) ・館内展示に係る自主研修(映像視聴や関連図書の閲覧等含む。)
7月6日(土) 10:00-12:00	敦賀ムゼウム	・福井大学スタディツアー 福井大学国際地域学部生と留学生合計39名が敦賀ムゼウムを訪問。4つのグループに分け、ボランティアガイドおよび敦賀ムゼウム職員と協力して常設展ガイドを実施した。
7月14日(日) 9:30-15:00	敦賀ムゼウム	・館内ガイド研修(常設展「敦賀の歴史」「ポーランド孤児」「ユダヤ難民」) ・館内展示に係る自主研修(映像視聴や関連図書の閲覧等含む。)
7月21日(日) 9:30-15:00	敦賀ムゼウム	・館内ガイド実践(一般来場者、敦賀ムゼウム職員、大学関係者に向けて)・評価 ・敦賀ムゼウム館長へのインタビュー、後期の活動について説明・質疑応答
7月31日(水) 13:00-17:00	福井大学 国際地域学部	・課題探求プロジェクト 前期成果報告会 2024年度後期の活動内容と成果について報告(プレゼンテーション)を行った。

(2024 年度後期)

日時		場所	実習・活動内容
10月12日(土)	9:30-15:00	敦賀ムゼウム	・オリエンテーション ・企画展「生命のメッセージ展」見学 ・武田耕雲斎等の墓(水戸藩天狗党)の見学、および学芸員の説明 ・常設展ガイド自主研修(12/15の本番に向けて、敦賀の歴史、ポーランド孤児、ユダヤ難民を一人でガイドする予定)
11月2日(土)	9:30-15:00	敦賀ムゼウム	・ブリッジプロジェクト「描くよるこびは国境を越えて」の運営補助(ポーランドと敦賀の子どもが大きな絵を半分ずつ描き、それぞれが完成したら一つの絵につなげる、というイベント) ・企画展「ワルシャワ。灰の中から甦る不死鳥」の見学・常設展ガイド自主研修
11月03日(日)	9:30-15:00	敦賀ムゼウム	・人道の港 敦賀ムゼウム リニューアルオープン 4周年記念イベント運営補助 ・来館者に対する常設展ガイドツアーの実施 ・新企画展「ワルシャワ。灰の中から甦る不死鳥」オープニングセレモニー運営補助
11月23日(土)	10:00-12:00	敦賀ムゼウム	・福井大学スタディツアー 福井大学国際地域学部生と留学生合計36名が敦賀ムゼウムを訪問。4つのグループに分けボランティアガイド、および敦賀ムゼウム職員と協力して常設展ガイドを実施した。
12月01日(日)	9:30-15:00	敦賀ムゼウム	・「プラバンでクリスマスオーナメントを作ろう！」ワークショップの運営補助 クリスマスツリーの作成を通してポーランド文化に触れる子どもたちのための異文化理解活動
12月14日(土)	10:30-16:00	福井市立図書館	・多文化共生イベントにおいて敦賀ムゼウムブースを設置し、DVD、冊子、ポスター、および、チラシを用いて人道の港 敦賀ムゼウムの常設展・企画展を紹介した。
12月15日(日)	9:30-15:00	敦賀ムゼウム	・来館者に対する常設展ガイドツアー ・館内ガイド実践・評価(一般来場者、敦賀ムゼウム職員、大学関係者を対象として)
1月23日(水)	13:00-17:00	福井大学 国際地域学部	・課題探求プロジェクト 最終成果報告会 2024年度後期の活動内容と成果について報告(プレゼンテーション)を実施した。

敦賀ムゼウム・キャリア教育実習における活動は、敦賀ムゼウムフェイスブック、X、HP、そしてインスタグラム等で配信された。主な物を以下に紹介する。

- ① 2024 年度前期 第 1 回(5 月 11 日)の活動は敦賀ムゼウム X より配信
<https://x.com/tsurugamuseum/status/1789221903749779489>
- ② 第 4 回(7 月 14 日)の活動は敦賀ムゼウム X とフェイスブックより配信
<https://x.com/tsurugamuseum/status/1812731642198598045>
https://www.facebook.com/story.php/?story_fbid=902520328579345&id=100064641583240&_rdr
- ③ 2024 年度後期 第 1 回(10 月 12 日)の活動は敦賀ムゼウム X より配信
<https://x.com/tsurugamuseum/status/1845015946462888077>
- ④ 第 2 回(11 月 2 日)ブリッジプロジェクトの様子はフェイスブックより配信
https://www.facebook.com/story.php?story_fbid=980862097411834&id=100064641583240&_rdr
- ⑤ 第 3 回(11 月 3 日)4 周年記念イベントでの活動は敦賀ムゼウムホームページで配信
<https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000000005.000129099.html>
- ⑥ 11 月 23 日 常設展ガイドの様子は敦賀ムゼウム X より配信
<https://x.com/tsurugamuseum/status/1860565545826877655>
- ⑦ 第 4 回(12 月 3 日)活動「プラバンでクリスマスオーナメントを作ろう！」ワークショップは敦賀ムゼウムフェイスブックより配信
https://www.facebook.com/story.php/?story_fbid=1003161248515252&id=100064641583240&_rdr
敦賀ムゼウムインスタグラムより配信
https://www.instagram.com/tsurugamuseum/p/DDB67jqSNQA/?hl=it&img_index=1

敦賀ムゼウム X より配信

<https://x.com/tsurugamuseum/status/1863144953242857788>

⑧ 第5回(12月15日)活動については敦賀ムゼウムフェイスブックより配信

https://www.facebook.com/story.php?story_fbid=1011620357669341&id=100064641583240&_rdr

敦賀ムゼウム X より配信

<https://x.com/tsurugamuseum/status/1868209294463914435>

⑨ 最終成果発表会(1月23日)は敦賀ムゼウムのインスタグラムより配信

https://www.instagram.com/tsurugamuseum/p/DFozsZISW5a/?img_index=1

2)敦賀スタディツアー

2024年度前期と後期に国際地域学部生、留学生、および技能実習生のグループで敦賀スタディツアーを実施、前期・後期合わせて延べ76名が参加した。内訳は、国際地域学部生38名、留学生34名、そして技能実習生4名で、15カ国・地域からなる国際色豊かな若者世代のグループで敦賀市を訪問した。このツアーの目的は、①鉄道と海運のまち・敦賀の発展の歴史を学ぶこと、②敦賀の人道の歴史を学ぶこと、③学生間交流、および地域交流を図ること、そして、④敦賀の魅力を世界に発信することである。最終的には、将来にわたって敦賀と交流を保ちながら、敦賀あるいは嶺南地区の多文化共生のまちづくりと地域の活性化に貢献することを期待するものである。

①第1回 敦賀スタディツアー

日時：2024年7月6日(土)

参加者：合計40名(11カ国・地域)

国際地域学部生23人、留学生16人、技能実習生1人、(引率教員1名)

(国・地域) イタリア、インドネシア、韓国、カンボジア、タイ、台湾

中国、ナイジェリア、バングラデシュ、マレーシア、日本

スケジュール

09:00 福井大学出発(移動:貸切バス往復)

10:10 人道の港 敦賀ムゼウム 常設展・企画展ガイドツアー

11:30 敦賀市立博物館 学芸員・ボランティアによるガイドツアー

12:30 敦賀市立博物館周辺で昼食

14:00 気比の松原

15:20 武生到着&グループ行動

武生ナイフビレッジ・万葉菊花園・Hugpopo・万葉の里

17:00 福井大学到着&解散

②第2回 敦賀スタディツアー

日時：2024年7月6日(土)

参加者：合計37名(11カ国地域)

国際地域学部生15人、留学生18人、技能実習生3人、引率教員1名
(国・地域) インド、カンボジア、スロバキア、韓国、タイ、台湾、
中国、フィリピン、マレーシア、ミャンマー、日本

スケジュール

09:00 福井大学出発(移動:貸切バス往復)

10:10 人道の港 敦賀ムゼウム 常設展・企画展ガイドツアー

11:30 敦賀駅周辺散策・昼食・グループ行動

13:30 気比神宮・グループ行動

14:00 人道の港 敦賀ムゼウム

ドキュメンタリー映画上映会、映画制作者による講演(敦賀ムゼウム)

「遙かなる日本へ ~知らされるポーランド人の物語~」

長年にわたって日本と関わりをもったポーランド人たちの歴史

17:00 福井大学到着&解散

敦賀スタディツアーは、人道の港 敦賀ムゼウム フェイスブックで紹介された。

第1回 敦賀スタディツアー(2024年7月6日)

『福井大学国際地域学部の学生と留学生、計39名が「敦賀スタディツアー」として来館され、観光ボランティアガイドつるがの皆さんの案内により、館内をご見学いただきました。参加者の中には、授業の一環で今年度から当館で実習を行っている同学部の大澤さん、田中さんや、昨年11月に行われたスタディツアーにも参加され、今回2度目の参加となる方もいらっしゃいました。』

2度目の参加となった3年生からは、「ポーランド孤児やユダヤ難民が敦賀に上陸した当時、日本ではどんなサポートが行われていたのかについて等、史料や市民証言を紹介する展示を見学するだけでなく、ボランティアガイドさんの案内のおかげで具体的に学び、より理解を深めることができました。」といった感想があり、今回初めて参加された留学生の一人からも「敦賀港の史実や他国とのつながりについて初めて学びました。展示には英語が併記され、シアター映像も英語字幕付きだったので、知らなかったことが分かりやすく学べて良かったです。」との感想をいただきました。

ムゼウムでの見学を終えた後は、敦賀市の歴史について更に詳しく学ぶべく、敦賀市立博物館へ向かわれました。こうしてじっくりと敦賀の歴史について皆さんに学んでいただける事を嬉しく思います。

福井大学のみなさん、ご来館いただきありがとうございました!』



第2回敦賀スタディツアー
上映作品「遙かなる日本へ」

第2回 敦賀スタディツアー（2024年11月23日）

『福井大学国際地域学部の学生36名が、スタディツアーで来館されました。午前中は4グループに分かれ、当館職員、ボランティアガイド、当館で実習を行っている福井大学生によるガイドで、館内を見学されました。ガイド側が思わず感心させられるような質問がでるなど深い学習い繋がった様子でした。』（福井大学実習生によるガイドの様子）



3) 多文化共生イベント (2024年12月14日)

報告者が担当する「多文化共生の実践と研究」の授業では、12月11日～18日の1週間を多文化共生週間と位置づけ、大学コミュニティ、地域社会、そして国際社会の3つのレベルにおける人権課題について学び、社会的マイノリティすべてを包摂する多文化共生のまちづくりについて考察すべく各種イベントを実施した。

12月14日に福井市立図書館で実施した多文化共生イベントでは、人道の港 敦賀ムゼウムと連携して、敦賀ムゼウム紹介ブースの設置、および難民映画祭パートナーズ上映会を実施した。

敦賀ムゼウムのブースでは、TVモニターを設置し、敦賀の人道の歴史(ユダヤ難民、およびポーランド孤児上陸)や、日本のグローバル化の玄関口として栄えた敦賀の発展の歴史についてDVDを放映した。さらに、常設展および1944年のワルシャワ蜂起を伝える企画展「ワルシャワ。灰の中から甦る不死鳥」等についての書籍、冊子、そしてポスターを展示、さらに、チラシを配布した。

難民映画祭では、『ムクウェゲ「女性にとって世界最悪の場所」で闘う医師』を上映した。候補10作品の中から学生達が選出した映画である。コンゴ民主共和国で40万人以上のレイプ被害者がいると言われる。その多くの女性を20年以上にわたって無償で治療してきた婦人科医デニ・ムクウェゲのドキュメンタリーフィルムである。

今回の難民映画祭は、2024年9月22日・28日に敦賀ムゼウムで行われたパートナーズ映画上映会(作品「ソニータ」)の紹介を受けて実施したものであり、国連UNHCR協会や、福井大学のホームページでも紹介された。

さらに、多文化共生イベントでは、学生が企画したモールアート・ワークショップ(LGBTQ+の人権啓発)とクリスマスイベント(異文化交流体験)を実施、さらに、福井市との連携事業で学生達が作成した人権啓発パネル(テーマ:子ども、女性、外国人、犯罪被害者、犯罪加害者、DV、同和問題)を展示した。



国連 UNHCR 協会 <https://www.japanforunhcr.org/how-to-help/rff-partners>
福井大学 <https://www.gcs.u-fukui.ac.jp/news/2024/12/03175/>

4. 成果

1) 人道の港 敦賀ムゼウムでのキャリア教育実習

① 敦賀の発展と人道の歴史を伝える館内ガイドを育成

敦賀ムゼウムでは福井大学国際地域学部生3名（県内出身者1名、県外出身者2名）が敦賀ムゼウム職員の指導を受けて1年～1年半の期間にわたりキャリア教育実習を行った。学生は活動毎に報告書を指導教員に提出、活動の意義、新たな発見や学びを確認し、次の活動目標を明確化し準備に繋げた。学生たちは敦賀ムゼウムの常設展のガイドが一人でできるよう努力を重ね、2024年度後期には、県内外からの一般来場者に向けて、敦賀の魅力、そして敦賀の発展と人道の歴史を伝えるガイド活動を実践している。また、学生たちはガイドの内容をさらに充実させること、そして、後に続く実習生の参考となるように、協力してオリジナルのガイド原稿を作成した。2025年3月16日(日)には、北陸新幹線敦賀開業1周年を記念して行われる「つるが街波祭」において、敦賀ムゼウムの来場者に対し館内ガイドツアーを実施する予定である。



② 関係人口と交流人口の拡大

キャリア教育実習生3名は、異文化交流イベントや国際理解イベント、そして館内ガイドを通じて、敦賀市民の文化的多様性、人権、そして共生についての意識改革と醸成に貢献してきた。同時に重要なことは、学生達が実習を通して敦賀の魅力を伝え、県内外からの人々と交流を重ねていく中で、敦賀に対する「郷土愛」を育てたことである。彼らは「敦賀のために」を胸に、引き続き、敦賀を国内外に発信し続け、敦賀市および嶺南地区において文化的多様性を成長と発展の源泉とする多文化共生のまちづくりを担う人材(関係人口)として活躍するとともに、今後、新たな関係人口および交流人口を拡大し、敦賀そして嶺南地区の活性化に大いに貢献することが期待される。

2) 敦賀スタディツアー

① 敦賀と国内外との交流拡大

敦賀スタディツアー参加者76名(15カ国・地域)のほぼ全員が敦賀訪問は初めてであり、彼らは、敦賀での新たな学びと経験を国内外に配信した。特筆すべきは、ツアー参加者の多くが、友人を伴って敦賀を再び訪問していることである。スタディツアーで訪問した場所、そしてまだ訪れていない観光名所や史跡への訪問、さらに、敦賀のイベント(花火大会、敦賀祭り、国際交流フェスタなど)への参加、伝統文化体験、そして食文化。学生達は

思い出の地として敦賀との交流を継続するとともに、彼らの経験を通して、彼らの友人や後輩の留学生たちが近い将来に敦賀を訪問するなど、交流人口の持続的な拡大が期待される。

(第1回 敦賀スタディツアー 2024年7月6日 気比の松原)



② 人権・平和・命の発信拠点

異なる国々から集まった学生同士が、人権・平和・命の大切さ尊さという同じ価値観で繋がり一体となれる場所が敦賀である。だからこそ、この地から人権・平和・命のメッセージが世界に届くことを学生達は理解し、その役割の一端を担いたいと感じ、行動する。それがこのツアーのもうひとつの効果である。

敦賀スタディツアーに対する参加者の満足度は高い。敦賀がポーランド、リトアニア、イスラエル、その他の多くの国々そして人々と繋がり、人権と平和の尊さ、そして命の大切さを発信する重要な拠点のひとつとなっていること、そして、敦賀市民が、敦賀の発展の歴史を鑑み、その拠点としての使命を認識し、その役割を大切に果たしていること、に対し学生達は感銘を受けている。この感動や共感こそが、人権・平和・命の大切さ尊さを訴え続ける彼らの原動力でになっていると考える。

3) 多文化共生イベント

① 嶺北地域で敦賀の歴史と敦賀ムゼウムを広める。

嶺北地域の人々、および福井大学学生の中で、古代から敦賀が大陸への重要な玄関口であり、国際貿易港のある国際色豊かな街として栄えてきたこと、人道の歴史があったこと、そして、これらの歴史を伝える資料館があること、を知っている人は意外と少ない。多文化共生イベントでは、敦賀ムゼウムのブースを設置し、海運と鉄道のまち・敦賀の発展と人道の歴史について、学生および一般来場者の方々に広く周知することができた。嶺北地域での広報を継続することで、敦賀ムゼウムに嶺北地域からの訪問者が増えることが期待される。

② 人権問題を自分事として捉えること。

作品「ムクウェゲ」は、コンゴ民主共和国の人権問題が我々先進国の日常生活と密接に関係していることを認識し、深刻な人権侵害の状況を自分事として捉え、その解決のために少

しでも行動を起こすことの必要性を視聴者に強く訴えている。このメッセージは、ポーランド孤児およびユダヤ難民の救済という歴史を経験した敦賀そして福井県でこそ、さらに強い共感を持って受け止められたと考える。多文化共生イベント参加者の多くから、ひとりでも多くの人々が人権問題を認識し、自分事として捉え、それぞれが声をあげ問題解決に取り組む力になることの重要性について、意見が聞かれた。地域社会の身近な人権課題の認識も合わせて、人権啓発の役割を果たすイベントになったと考える。

5. まとめ

本事業は以下に貢献することを目的に実施し、その目的をほぼ達成できたと考える。

- ① 海運と鉄道のまち・敦賀の発展と人道の歴史を学び県内外に配信
- ② 人権啓発、文化的多様性に対する市民の意識改革と醸成、多文化共生のまちづくり
- ③ 関係人口および交流人口の増加による敦賀および嶺南地域の活性化

本事業で支援していただいた学生達が、多くの方々との交流や地域での経験を通して、本授業のテーマである「人権・多様性・共生」について多くを学び、ひとりの人間として成長させていただいたことに、心から感謝を申し上げたい。ご支援、本当にありがとうございました。

NOTE:

本事業は、課題探求プロジェクト I・II (2年生) IIIA・IIIB(3年生)「多文化共生の実践と研究」(受講生合計 28 名)で実施しました。

科目担当者: 小幡浩司 (文京キャンパス教育系 1 号館 3 階、TEL 0776.27.9876 内線 2156)